調査研究 3

京都学生祭典実行委員の活動を通じた成長実感調査

～インターカレッジ活動の効果検証と更なる事業改善に向けて～

京都学生祭典実行委員の活動を通じた成長実感調査
～インターカレッジ活動の効果検証と更なる事業改善に向けて～

研究代表者　森　正美（京都文教大学総合社会学部　教授）
共同研究者　大東　貢生（佛教大学社会学部　准教授）
笠井　賢紀（龍谷大学社会学部　専任講師）
桂　良太郎（大学コンソーシアム京都　学生交流事業部長
立命館大学国際関係学部教授）
生谷　謙次（大学コンソーシアム京都　学生交流事業部次長）
中本　雅和（大学コンソーシアム京都　学生交流事業部主幹）
【協力】　NPO 法人　JAE

1．全体概要

(1) 研究の目的

京都学生祭典実行委員会の活動はインターカレッジで社会と連携して行う正課外活動である。この活動によりどのように成長するのかを定量的・定性的に分析することで実行委員の特徴、身につけることのできる能力ならびに今後の課題を明らかにし、事業改善に活かすことを目的とした。

(2) 研究手法

a. 量的調査

客観的に「ジェネリックスキル（コンピテンシーおよびリテラシー）」を測定できる PROG テストを学生の活動前後で実施し、学生の成長を「客観的」に把握した。また、学生祭典実行委員に求める独自の能力指標をレベル別に確認できるルーブリック形式のアンケートにて調査し、学生の成長を「主観的」に把握した。さらに成長が祭典活動によるものか否かを学修活動アンケートによって調べた。これにより京都学生祭典実行委員会活動に多くの労力を費やしている学生は、客観的には「協働力」主観的には「前向き力」が上がっている。また、客観的に協働力が上がっている学生は主観的に「コミュニケーション能力」が上がる傾向にあり、主観的に前向き力が上がっている学生は客観的に「感情抑制力」が上がる傾向があることが明らかになった。この傾向については質的調査によりさらに明らかにする。

b. 質的調査

計画立案期、企画実施期、祭典後のタイミング等による定期的なインタビュー調査を行うことによって、質的な成長の変化等を確認し、実行委員の特徴を 4 タイプに分類した。その内、活動前から能力が高く活動後にさらに能力を伸ばした「前向き素直型」、活動前は平均的な能力であったが、活動後に著しく能力を伸ばした「関係性重視型」、活動前から能力が低く活動後も能力の伸びが芳しくなかった「自信薄弱型」についてさらに考察を加えた。結果、「前向き素直型」「関係性重視型」の学生については量的調査の全体傾向に従い顕著に能力が伸びたのに対し、「自信薄弱型」の学生の能力は伸び悩んだ。

(3) 結果と考察

量的調査および質的調査にて学生祭典実行委員の学生は顕著に協働力が伸びている傾向にあり、特徴として、「チームでの作業や活動が多い」、「一人で完結する活動ではない」さ

らに他大学の学生、社会人、地域の方々など「多様な他者との出会い」を含む、京都学生祭典実行委員会活動の特徴によるものでないかと考えられる等が明らかになった。

（４）今後の研究課題

本調査結果を踏まえ、全体のプログラム設計の検討、成長実感を高めるため個別学生への教育的サポートの是非、地域連携の結果、地域側がどのように考えるかの検討、実行委員終了後のキャリア開拓についてのフォロー体制、コンソーシアム事業を通じて成長した人材の地域定着も含めて、今後の課題といえる。

２．研究概要

（１）研究の背景

a. 京都学生祭典概要

京都学生祭典は、学生の力で京都と盛り上げようと 2003 年から毎年 10 月、平安神宮前・岡崎公園一帯をステージに繰り広げられる一大イベントです。2015 年度で 13 回を数えた学生祭典は、企業、大学、行政、地域、そして学生が手をとりあい、京都の新たな伝統を担う祭りへと進化しつつある。

音楽を目指す若者の登竜門的存在である学生音楽コンテスト「ＫＳＭＡ」、祭典の目玉企画である「京炎 そでふれ！全国おどりコンテスト」、数多くのブースがにぎやかな祭の空間を演出する「縁日」、祭典の魂を乗せて担ぐ「京炎みこし」、祭典の１日を締めくくるハイライトステージ「Grand Finale」などの企画をメインに毎年さまざまな催しが 10 万人の観客を魅了している。

b. 実行委員会概要

2015 年度は、23 大学から 219 名の学生が実行委員として活動を行った。学年内訳は、1 年生 98 名、2 年生 69 名、3 年生 52 名であった。複数年参加している学生も 6 割から 7 割存在し、200 名を超える学生たちが下の図に示すように 7 つの部署と執行部に分かれ、企業や行政、地域と連携しながら、1 年を通じて正課外のインターカレッジな活動を展開している。

図 1.　運営体制

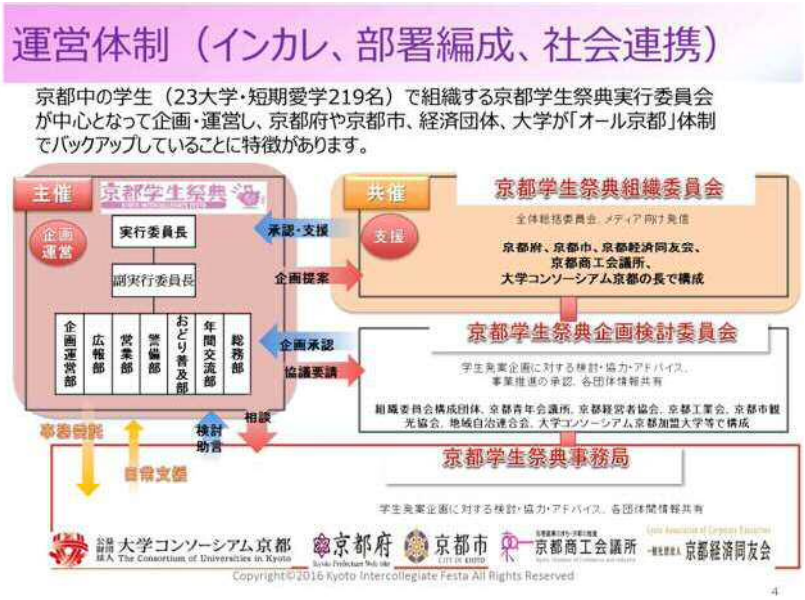
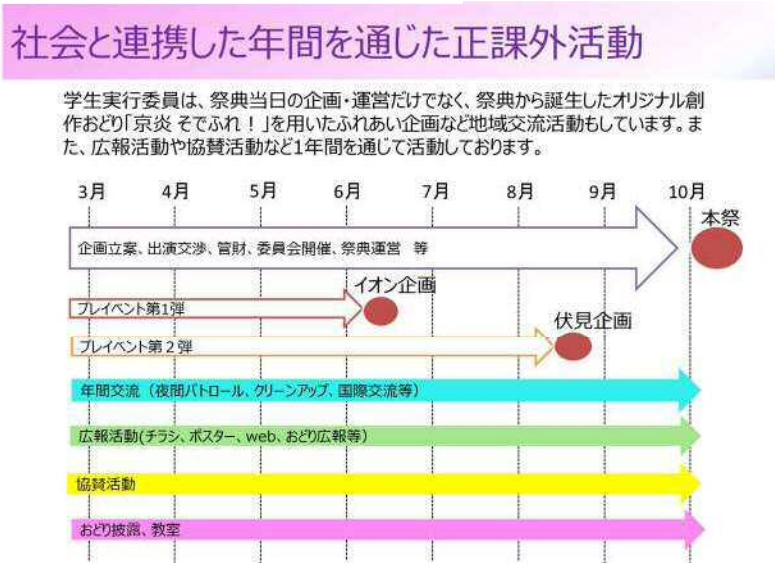


図 2. 通年にわたる活動内容



c. 課題の発見と PBL の意識化

このような京都学生祭典であるが、回数を重ねるにつれ、祭典のステークホルダーを中心に、学生たちにとっての京都学生祭典実行委員会活動の意義や、コンソーシアム事業としての特色や目的の明確化が必要ではないかという意見が聞かれるようになった。そのため学生交流事業部を中心に実行委員会活動をひとつの PBL（プロジェクト型学習活動）として捉え、学生たちに活動を通じた自己成長を実感してもらおうとする試みが加わった。具体的には中間・事後ふりかえりワークショップの実施、事前/事後アンケートの実施である。

（２）研究目的

上記に述べた学生祭典に対する問題意識を踏まえ、本研究では、①学生たちは、活動を通じてどのように成長しているか、実行委員会活動の特性とは何か、さらに京都学生祭典の活動だからこそ学生が成長することは何かを明らかにすることを目指した。

また②活動を通じて、学生たち自身には、どのような成長が実感されているかを把握することももう一つの目的である。つまり、学生自身が実際に成長するだけでなく、自らの成長を適切に言語化し、実行委員会活動の経験を事後にも生かすことができるようになっているかという点を明らかにすることを目指した。

このような研究を通じて、京都学生祭典実行委員会活動の課題と今後に必要なサポート、あるいはコンソーシアム事業として目指すべき姿を考えることも本調査課題の最終的な目的といえる。

（３）研究対象

京都学生祭典実行委員会の学生を対象として調査を実施した。活動の事前段階では、PROG テストを 149 名が受験し、ルーブリックアンケートの回答数が 182 名であった。活動の事後には、PROG テストを 89 人が受験し、ルーブリックアンケートには 79 人が回答した。

これら 4 種類全てを受験した者が 76 名であり、これを本研究の調査対象とした。

（4）分析方法

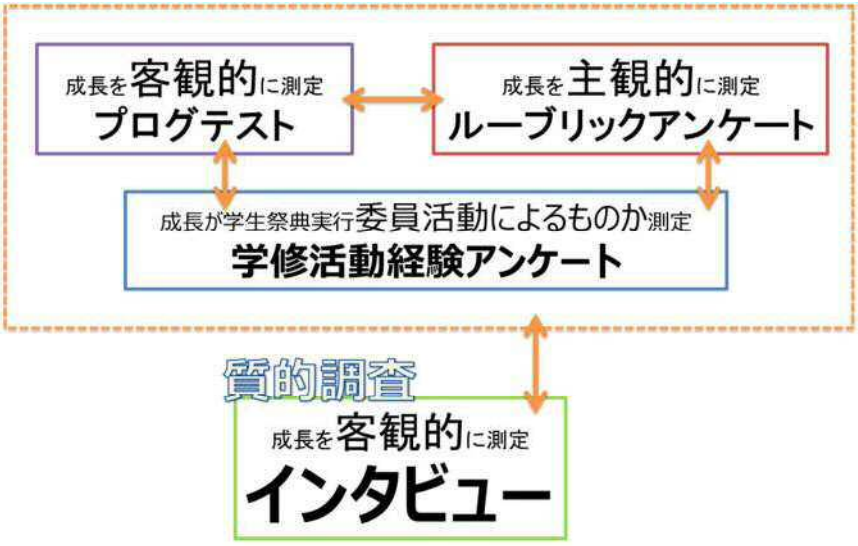
実行委員会活動を開始する事前と事後に PROG テストを実施し、活動前後でのリテラシーとコンピテンシーの変化を分析した。

また、ステークホルダーも参加してミーティングを重ね、独自の指標を用いたルーブリックを作成し、活動の事前と事後の調査を実施した。その際には、学生の成長が「学生祭典実行委員会活動」によるものかどうかを判断できるように「学修活動アンケート」も同時に実施した。

さらに学生個人に対して、成長実感をどのように言語化するかを調べるインタビューを実施した。全員のインタビューは実施できないので、実行委員の経験年数、部署、役職などを考慮し、サンプル抽出を行った。

これらの量的/質的調査の結果の関連分析を行い、客観的な成長と、学生の成長についての主観的な実感とを双方向から分析した。

図 3.　調査手法



（4）　研究体制

これまで京都学生祭典のワークショップや、PBL の実践に関わってきた研究者と、実行委員会のメンバーを日常的にサポートしている職員による共同研究を実施した。研究メンバーは標記の通りである。

全体の研究調整を代表者の森が担当し、量的調査の分析は主に大束が担当、インタビューの実施と資料分析は笠井が担当した。ルーブリックの作成にあたっては、実行委員や企画院も加わったワークショップを数回実施したが、その際は NPO 法人 JAE にワークショップの運営、記録作成、ルーブリック原案整理に協力頂いた。PROG テストのデータ処理については、（株）リアセックに委託した。

ルーブリックの原案の修正や、調査データの分析や二次加工などについては、年 13 回開催した研究会の際に議論を重ねた。またインタビュー対象者の選定には、日常的に実行委員と接している学生交流事業部職員の意見を参考にした。

３．研究のオリジナリティ

（１）調査対象の独自性

学生の成長実感、あるいは成長評価に関する調査は、正課授業に関するものは数多く実施されているが、課外活動に対する調査はまだ多くない。特に京都学生祭典は、複数の大学の学生が参加しているインターカレッジの活動であること、さらに社会との連携をしている課外活動としては日本最大規模であり、このような課外活動において学生がどのように成長するのかを調査した事例としては他に類をみない規模である。

（２）調査手法の独自性

PBL の評価調査といった場合、学生による自己評価を中心としたものが一般的である。しかし本調査においては、PROG テストの結果と、独自の指標を用いたルーブリック調査、さらに学生個人に対するインタビュー調査を実施している。これらの量的/質的調査の関連分析を行い、客観的な成長の度合いと、学生の主観的成長の実感とを双方向から分析している点が特徴的である。

４．研究内容

ここでは、本研究で実施した調査研究の内容について、量的調査、質的調査に分けて述べる。

（１） 量的調査の結果

ａ．調査の概要

先述の 2 章 2 節で述べた 2 つの目的、すなわち①学生たちは活動を通じてどのように成長しているか、京都学生祭典の活動だからこそ学生が成長することは何か、②学生たち自身にはどのような成長が実感されているか、について分析を行うため以下の調査を行った。

b. 成長を客観的に測定する「PROG テスト」

実行委員会に属する学生の特徴や活動から育まれる力量を客観的に明らかにするため、客観的に「ジェネリックスキル（コンピテンシーおよびリテラシー）」を測定できる PROG テストを学生の活動前後で実施した（文末資料 1 参照）。時期は学生祭典活動前（事前）テストを 2015 年 10 月本祭までの参加登録と同時に随時実施、学生祭典活動後（事後）テストを本祭終了後の 2015 年 10 月中旬から 11 月下旬に実施した。

c. 成長を主観的に測定する「ルーブリックアンケート」

学生祭典実行委員に求める独自の能力指標をレベル別に確認できるルーブリック形式のアンケートを、実行委員を支えるステークホルダーと実行委員による「成長指標作成ワークショップ」にて作成した（文末資料 2 参照）。グループワークを通じて学生祭典を成功・発展させることができる人物像や、求められる力量を洗い出すことで様々な能力を整理し、その結果を活動前後で比較することで実行委員会に属する学生の特徴や活動から育まれる力量を主観的に明らかにする。時期は学生祭典活動前（事前）アンケートを 2015 年 4 月から 6 月に、学生祭典活動後（事後）アンケートを本祭実施後の 2015 年 10 月に実施した。

d. 成長が学生祭典実行委員の活動によるのかを測定する「学習活動経験アンケート」

参加学生が行っている学習活動において、主観的にどの程度頑張ったのか、客観的にどの程度の時間を費やしたのかを見るために、学生の属性と学習活動経験に関するアンケートを上記②のアンケートに付随して実施した（文末資料 3 参照）。時期は②と同じく、学生祭典活動前（事前）アンケートを 2015 年 4 月から 6 月に、学生祭典活動後（事後）アンケ

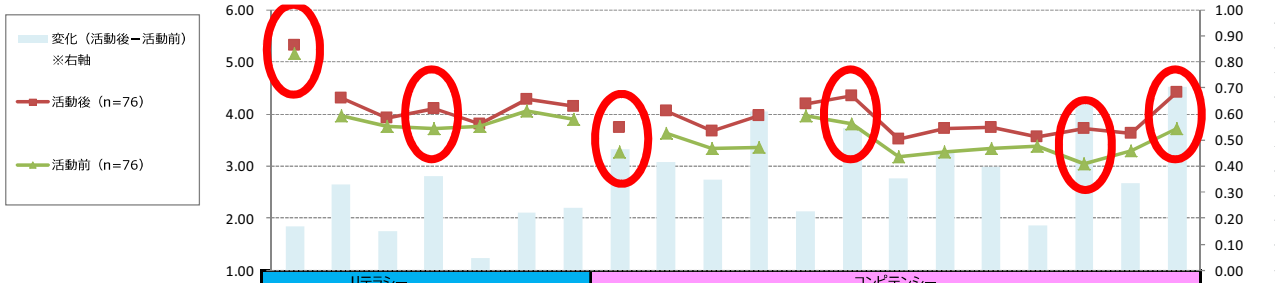
ートを本祭実施後の 2015 年 10 月に実施した。

調査対象は、2 章 3 節にあるように 3 つの調査をすべて受けた 76 名である。また分析については SPSS. 23. 0J を使用した。

e. 客観的な成長項目と学生祭典活動との関係

PROG テストの活動前と活動後の各項目の比較として平均値のスコアの向上について比較を行った（図 4)。最大値は 7、最小値は 1 である。リテラシーに関連する 6 項目、コンピテンシーに関連する 12 項目での平均値の比較を行った結果、リテラシーの「総合」(事前平均値 5. 15→事後平均値 5. 32)、リテラシーの「課題発見力」(同 3. 73→4. 09)、コンピテンシーの「総合」(同 3. 27→3. 74)、コンピテンシー対人基礎力の「協働力」(同 3. 81→4. 36)、対課題基礎力の「課題発見力」(同 3. 05→3. 71)、「実践力」(同 3. 72→4. 42) の 6 項目の向上が著しいことが明らかになった。

図 4.　PROG テスト活動前後比較



		リテラシー							コンピテンシー											
		総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
													親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
変化（活動後－活動前） ※右軸		0.17	0.33	0.15	0.36	0.05	0.22	0.24	0.47	0.42	0.35	0.61	0.22	0.54	0.35	0.45	0.40	0.17	0.66	0.33	0.70
スコア	活動後（n=76）	5.32	4.30	3.92	4.09	3.82	4.29	4.14	3.74	4.05	3.68	3.96	4.20	4.36	3.53	3.72	3.74	3.55	3.71	3.63	4.42
	活動前（n=76）	5.15	3.97	3.77	3.73	3.77	4.07	3.91	3.27	3.64	3.34	3.35	3.97	3.81	3.18	3.27	3.34	3.38	3.05	3.30	3.72

101_PROGスコア_前後比較

○ で囲まれた 6 項目を目的変数として分析

これら上記 6 項目の平均値の伸びと学生の主観的ながんばり度合いとの関係をみるために相関分析（ピアソンの積率相関係数）を行った（図 5)。主観的ながんばり度合いについては「授業」「課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等)」「学内イベントの企画・運営等」「部活・サークル」「インターンシップ・実習」「ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動)」「アルバイト」「学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業)」「ボランティア活動（大学と関係のない自主的活動)」「友人や家族との交流」「家族との交流や世話」「趣味・習い事」の 12 項目について、それぞれの項目をどの程度頑張ったのかについて、6 件法で質問を行った。

結果、「学生祭典」と正の相関となっている成長項目は 5%有意の水準で、コンピテンシー「総合」(相関係数　0. 257)、コンピテンシー対人基礎力の「協働力」(同　0. 297) であり、学生祭典の活動を頑張った人とコンピテンシー対人基礎力の「協働力」の向上が特に関係していることが明らかになった。

この結果を確認するために、主観的ながんばり度合いを独立変数、コンピテンシー対人基

礎力の「協働力」を従属変数とする回帰分析を行った（図 6）。調整済みの強制投入法によれば、「学生祭典」の活動は有意確率が 11%であるものの、決定係数が 0.451 に上がったため、「学生祭典」の活動は「協働力」の向上を説明できるといえる。

まとめると、学生祭典の活動を頑張った人はコンピテンシー対人基礎力の「協働力」が向上しているといえるであろう。

図 5.　PROG テストとがんばり度合との相関関係

（凡例：　1％有意　5％有意）　10%有意）

相関係数	[前回]リテラシー総合	[前回]リテラシー課題発見力	[前回]総合評価	[前回]課題発見力	[前回]協働力	[前回]実践力	授業（講義・演習等）	課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	学内イベントの企画・運営等	部活・サークル	インターンシップ・実習	ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	アルバイト	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	友人や家族との交流	家族との交流や世話	趣味・習い事
[前回]リテラシー総合	1																	
[前回]リテラシー課題発見力	.620	1																
[前回]総合評価	.022	.033	1															
[前回]課題発見力	.244	.185	.483	1														
[前回]協働力	-.066	-.025	.826	.255	1													
[前回]実践力	.017	-.070	.378	.224	.317	1												
授業（講義・演習等）	-.073	.068	-.067	-.115	-.042	.193	1											
課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	.051	.127	.011	.097	-.100	-.171	.244	1										
学内イベントの企画・運営等	.001	-.087	.088	.127	-.024	.007	.172	.287	1									
部活・サークル	-.011	-.121	.117	.058	.082	.050	-.053	.187	.269	1								
インターンシップ・実習	.039	-.030	.026	.014	-.078	.041	.003	-.009	.305	.312	1							
ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	.028	.154	.079	-.078	.093	.213	.185	-.021	.134	.019	.194	1						
アルバイト	-.043	-.196	.008	-.265	.130	-.092	.001	.049	.011	.035	.149	.130	1					
学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	.023	.003	.257	-.206	.297	.017	.033	-.193	-.158	-.116	.085	.101	-.036	1				
ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	.052	.036	.246	.100	.164	-.008	.019	.005	.161	.112	.050	.152	-.157	.092	1			
友人や家族との交流	-.046	.007	.244	.025	.294	.129	.253	.092	.153	.046	-.012	.140	.192	.133	-.032	1		
家族との交流や世話	.002	.066	.087	.012	.146	.051	.041	.165	.239	.095	.098	.016	.187	-.079	.057	.508	1	
趣味・習い事	.080	.022	.096	-.068	.220	.132	.018	.007	.098	.139	.079	.195	.315	.118	.142	.390	.383	1

集計結果_相関行列

図 6.　がんばり度合との重回帰分析

○コンピテンシー協働力はステップワイズ法で「前回コンピテンシー協働力」のみが採用となった（決定係数は 0.448）。

○強制投入法にて、

$$y_{it} = \beta y_{i,t-1} + \alpha \delta_i$$

）有意確率は 11%だが、決定係数が 0.451 に上がった。→こちらのモデ

コンピテンシー協働力の事後スコア　0.616×コンピテンシー協働力の事前スコア　+0.301×学生祭典　+0.499（定数）

強制投入法（調整済み）		係数	有意確率
β	[前回]協働力	0.616	0%
α	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	0.301	11%
	定数	0.499	60%
		N=	70
		R2=	0.451

※参考

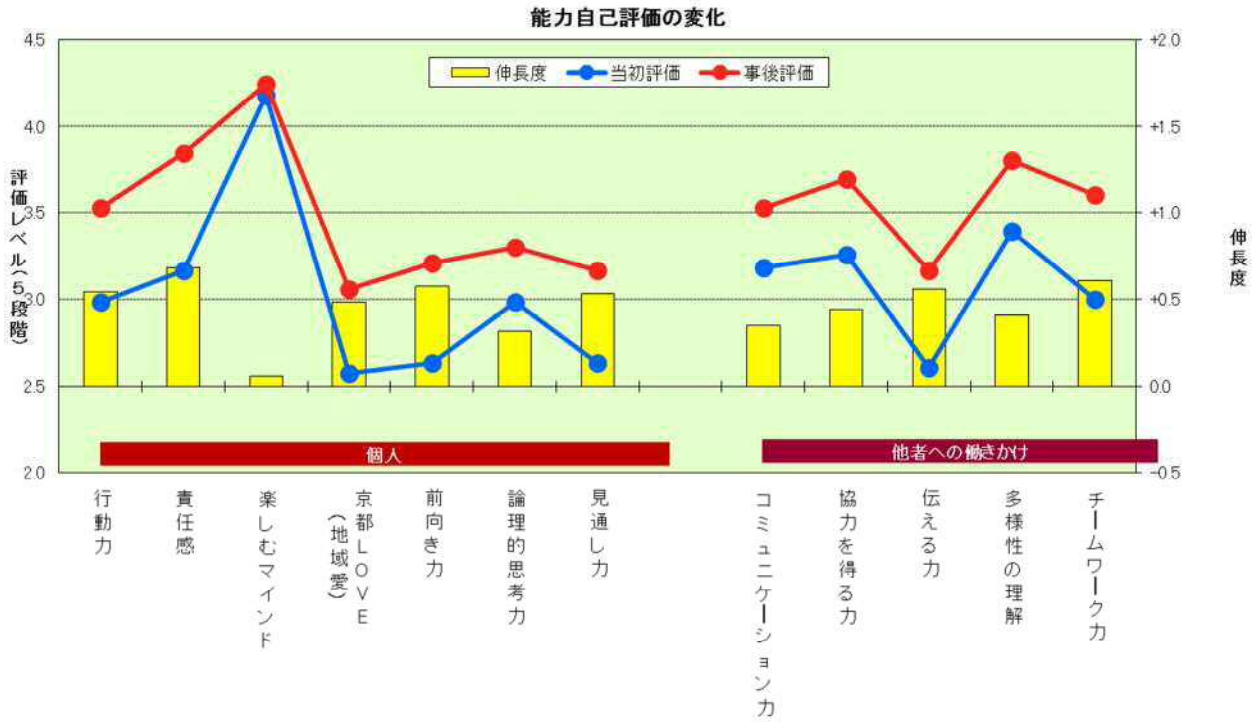
ステップワイズ法		係数	有意確率
β	[前回]協働力	0.666	0%
	定数	1.921	0%
		N=	70
		R2=	0.448

強制投入法		係数	有意確率
β	[前回]協働力	0.607	0%
α	授業（講義・演習等）	-0.122	26%
	課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	0.065	56%
	学内イベントの企画・運営等	0.046	69%
	部活・サークル	-0.036	75%
	インターンシップ・実習	-0.047	68%
	ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	0.041	69%
	アルバイト	0.097	38%
	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	0.192	9%
	ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	0.001	99%
	友人や家族との交流	-0.124	35%
	家族との交流や世話	0.111	41%
	趣味・習い事	0.059	63%
		N=	70
		R2=	0.402

f．主観的な評価項目と学生祭典活動との関係

ルーブリックアンケートでは、個人活動の評価として「行動力」「責任感」「楽しむマインド」「京都ＬＯＶＥ（地域愛）」「前向き力」「論理的思考力」「見通し力」、他者への働きかけとして「コミュニケーション力」「協力を得る力」「伝える力」「多様性の理解」「チームワーク力」の 12 項目を設定し、学生祭典活動前（事前）、学生祭典活動後（事後）にアンケートを実施した。最大値は 5、最小値は 1 である。事前評価と事後評価の平均値を比較すると、楽しむマインド以外のすべての項目において、評価が高くなる結果となった（図 7）。

図 7.　ルーブリック活動前後比較



これらの評価項目の平均値の伸びと委員の主観的ながんばり度合いとの関係をみるために相関分析（ピアソンの積率相関係数）を行った（図 8）。結果、「学生祭典」活動と正の相関になった評価項目は「前向き力」（相関係数　0.328）が 5%水準で有意であった。これは、学生祭典の活動を頑張った人と学生祭典委員の「前向き力」の評価の向上に特に関係があることを示している。

g．客観的な成長項目と主観的な評価項目との関係性

それでは、学生祭典活動によって伸びた客観的な成長項目である「協働力」と主観的な評価項目である「前向き力」との間にはどのような関係性が見られるのであろうか。両者の関係性を見るために、PROG テストとルーブリックアンケートにおいて相関分析（ピアソンの積率相関係数）を行った（図 9）。結果、「協働力」と「前向き力」とは 1%水準で有意な正の相関（相関係数　0.347）となり、両者には強い関係性があることが明らかとなった。

図 8.　ルーブリックとがんばり度合との相関関係

（凡例：　1％有意　5％有意　10%有意）　10%有意）

相関係数	行動力	責任感	楽しむマインド	京都LOVE（地域愛）	前向き力	論理的思考力	見通し力	コミュニケーション力	協力を得る力	伝える力	多様性の理解	チームワーク力	授業（講義・演習等）	課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	学内イベントの企画・運営等	部活・サークル
行動力	1.000															
責任感	0.334	1.000														
楽しむマインド	0.471	0.427	1.000													
京都LOVE（地域愛）	0.435	0.497	0.472	1.000												
前向き力	0.336	0.392	0.414	0.460	1.000											
論理的思考力	0.356	0.535	0.304	0.354	0.477	1.000										
見通し力	0.459	0.505	0.415	0.521	0.536	0.516	1.000									
コミュニケーション力	0.382	0.584	0.433	0.527	0.487	0.556	0.565	1.000								
協力を得る力	0.357	0.303	0.404	0.371	0.435	0.393	0.387	0.587	1.000							
伝える力	0.356	0.407	0.366	0.455	0.422	0.412	0.407	0.667	0.648	1.000						
多様性の理解	0.423	0.495	0.427	0.475	0.406	0.490	0.525	0.519	0.453	0.612	1.000					
チームワーク力	0.414	0.601	0.418	0.398	0.278	0.461	0.468	0.535	0.346	0.484	0.520	1.000				
授業（講義・演習等）	0.236	0.015	0.156	0.205	0.182	0.279	0.152	0.163	0.163	0.180	0.110	0.082	1.000			
課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	0.095	0.061	0.055	0.227	0.115	0.144	0.252	0.258	0.059	0.215	0.184	0.195	0.583	1.000		
学内イベントの企画・運営等	(0.242)	0.022	0.053	0.004	0.066	(0.014)	0.190	0.216	(0.001)	0.062	(0.011)	0.149	(0.051)	0.270	1.000	
部活・サークル	0.085	0.026	0.067	0.128	0.288	0.201	0.342	0.279	0.033	0.234	0.190	0.096	0.355	0.399	0.212	1.000
インターンシップ・実習	0.188	(0.106)	0.174	(0.012)	0.240	0.034	0.163	0.110	0.080	0.163	0.061	0.012	0.325	0.184	0.167	0.451
ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	0.265	(0.031)	(0.046)	0.008	0.011	0.037	0.084	0.108	0.201	0.142	(0.048)	0.031	0.428	0.233	(0.278)	0.151
[illegible]	0.198	(0.039)	0.120	0.155	[illegible]	0.222	0.274	0.115	0.099	0.250	0.264	0.184	0.513	0.415	0.103	0.291
[illegible]生祭典（大[illegible]コンソーシアム[illegible]都の事業）	0.246	0.160	0.160	0.192	0.328	0.260	0.276	0.191	0.071	0.115	0.148	0.103	0.739	0.402	0.005	0.335
ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	0.142	0.053	0.111	0.015	0.142	0.014	0.192	0.140	0.118	(0.065)	(0.031)	(0.134)	0.295	0.260	0.119	0.308
友人や家族との交流	0.185	0.079	0.081	0.261	0.230	0.253	0.159	0.192	0.033	0.126	0.184	0.083	0.798	0.537	0.014	0.373
家族との交流や世話	0.126	0.021	0.008	0.231	0.148	0.172	0.210	0.275	0.038	0.160	0.138	0.022	0.602	0.529	0.327	0.366
趣味・習い事	0.286	(0.074)	(0.031)	0.066	0.084	(0.068)	0.143	(0.059)	0.074	(0.032)	0.038	(0.044)	0.145	0.106	(0.018)	0.141

図 9.　PROG テストとルーブリックとの相関関係

（凡例：　1％有意　5％有意）　10%有意）

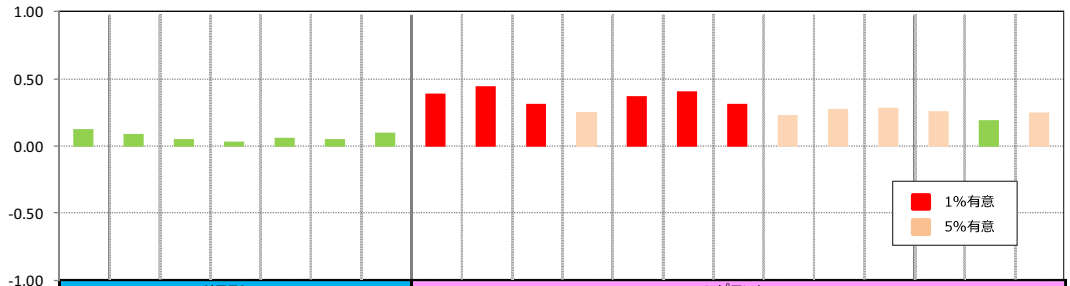
	リテラシー							コンピテンシー													アンケート（自己評価）										
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力												
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力	行動力	責任感	楽しむマインド	京都LOVE（地域愛）	前向き力	論理的思考力	見通し力	コミュニケーション力	協力を得る力	伝える力	多様性の理解	チームワーク力
行動力	0.005	0.098	0.008	-0.027	0.094	-0.112	0.128	0.415	0.392	0.344	0.219	0.323	0.420	0.379	0.237	0.315	0.363	0.269	0.103	0.169	1.000											
責任感	0.230	0.154	0.181	0.104	0.060	0.179	0.247	0.328	0.352	0.314	0.253	0.323	0.401	0.167	0.208	0.315	0.215	0.173	0.183	0.318	0.313	1.000										
楽しむマインド	0.092	0.044	0.155	0.214	0.110	0.119	0.054	0.395	0.322	0.466	0.155	0.287	0.327	0.239	0.418	0.434	0.412	0.165	0.050	0.274	0.231	0.273	1.000									
京都LOVE（地域愛）	0.029	0.014	0.098	0.078	0.052	-0.036	-0.046	0.202	0.216	0.166	0.089	0.172	0.185	0.267	0.171	0.243	0.087	0.177	0.006	0.098	0.148	0.151	0.193	1.000								
前向き力	-0.014	0.038	0.144	0.212	-0.007	0.170	0.107	0.415	0.339	0.415	0.276	0.303	0.347	0.312	0.499	0.339	0.325	0.261	0.169	0.266	0.175	0.402	0.475	0.094	1.000							
論理的思考力	0.151	0.032	0.187	0.232	0.136	0.109	0.095	0.320	0.261	0.275	0.399	0.151	0.270	0.253	0.171	0.308	0.251	0.498	0.308	0.248	0.165	0.140	0.275	0.124	0.276	1.000						
見通し力	-0.074	-0.134	-0.035	-0.068	-0.069	-0.101	0.066	0.258	0.277	0.204	0.253	0.300	0.311	0.149	0.159	0.220	0.149	0.213	0.178	0.284	0.376	0.451	0.381	0.290	0.337	0.455	1.000					
コミュニケーション力	0.126	0.085	0.056	0.036	0.059	0.050	0.095	0.390	0.448	0.314	0.244	0.372	0.405	0.312	0.229	0.273	0.285	0.261	0.188	0.246	0.217	0.448	0.348	0.220	0.275	0.495	0.559	1.000				
協力を得る力	0.174	0.078	0.365	0.086	0.103	0.163	0.268	0.122	0.126	0.083	0.068	0.229	0.111	0.002	0.197	0.175	-0.008	0.065	0.028	0.020	0.278	0.325	0.355	-0.002	0.342	0.153	0.244	0.334	1.000			
伝える力	0.238	0.142	0.291	0.077	0.227	0.280	0.247	0.395	0.333	0.323	0.325	0.384	0.282	0.283	0.328	0.387	0.185	0.397	0.253	0.163	0.213	0.360	0.226	0.337	0.319	0.367	0.359	0.495	0.420	1.000		
多様性の理解	0.121	-0.072	0.064	0.021	0.102	0.147	0.250	0.206	0.185	0.135	0.357	0.211	0.230	0.073	0.145	0.166	0.090	0.382	0.305	0.204	0.238	0.384	0.143	0.114	0.232	0.360	0.452	0.416	0.353	0.480	1.000	
チームワーク力	-0.055	-0.131	-0.028	0.020	-0.075	-0.186	-0.042	0.370	0.352	0.368	0.172	0.429	0.336	0.209	0.354	0.329	0.275	0.204	0.108	0.298	0.351	0.472	0.326	0.177	0.324	0.333	0.491	0.468	0.368	0.449	0.411	1.000

さらに客観的な成長項目である「協働力」と主観的な評価項目である「前向き力」についてより詳しく見ていきたい。客観的な成長項目である「協働力」と関係のあるルーブリックアンケート項目を見ていくとルーブリックアンケートの「コミュニケーション力」との相関が 1%水準で有意（相関係数　0.405）であり、「協働力」と「コミュニケーション力」との間に強い正の関係があることが明らかとなった（図 10）。

図 10.　協働力とコミュニケーション力との相関関係

○「コミュニケーション力」の自己評価と PROG 基礎力（客観評価）の関係性をみるために、相関係数を算出した。
○リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4 以上の相関がみられるものは対人領域の**「協働力」**であった（有意確率１%未満）。 ±0.2～0.4 未満の弱い相関では、コンピテンシーでは対人領域の**「親和力」「統率力」**、対自己領域の全項目（**「感情制御力」「自信創出力」「行動持続力」**）、対課題領域の**「課題発見力」「実践力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：コミュニケーション力



	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	0.13	0.09	0.06	0.04	0.06	0.05	0.09	0.39	0.45	0.31	0.24	0.37	0.40	0.31	0.23	0.27	0.29	0.26	0.19	0.25
有意確率	0.28	0.46	0.63	0.76	0.61	0.67	0.42	0.00	0.00	0.01	0.03	0.00	0.00	0.01	0.05	0.02	0.01	0.02	0.10	0.03
10%未満＝△ 5%未満＝○ 1%未満＝◎								◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	○	○	○	○		○

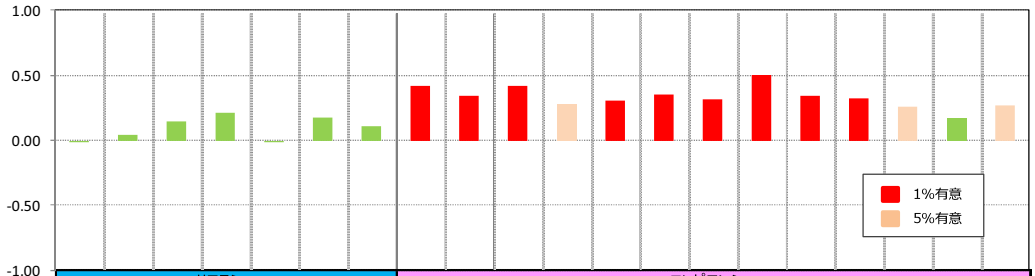
008_b1_相関

また、主観的な評価項目である「前向き力」と関係のある PROG テスト項目を見ていくと PROG テストの「感情制御力」との相関が 1%水準で有意（相関係数　0.499）となり、両者には強い関係性があることが明らかとなった（図 11）。

図 11.　前向き力と感情抑制力との相関関係

○「前向き力」の自己評価と PROG 基礎力（客観評価）の関係性をみるために、相関係数を算出した。
○リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4 以上の相関がみられるものは対自己領域の**「感情制御力」**であった（有意確率１%未満）。 ±0.2～0.4 未満の弱い相関では、リテラシーでは**「課題発見力」**、コンピテンシーでは対人領域の全項目（**「親和力」「協働力」「統率力」**）、対自己領域では**「自信創出力」「行動持続力」**、対課題領域の**「課題発見力」「実践力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：前向き力



	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	-0.01	0.04	0.14	0.21	-0.01	0.17	0.11	0.42	0.34	0.41	0.28	0.30	0.35	0.31	0.50	0.34	0.32	0.26	0.17	0.27
有意確率	0.90	0.74	0.21	0.07	0.95	0.14	0.36	0.00	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.02	0.14	0.02
10%未満＝△ ５%未満＝○ １%未満＝◎				△				◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○		○

005,p5,相関

h．まとめ

以上、PROG テストによる客観的成長項目、ルーブリックアンケートによる主観的評価項目、学習活動経験アンケートによる学生祭典活動の主観的ながんばり度合いの関係性について分析を行った結果、京都学生祭典実行委員会活動に多くの労力を費やしている学生は、①客観的には協働力、主観的には前向き力が上がっており、②客観的に協働力が上がっている学生は主観的にはコミュニケーション力が上がり、③主観的に前向き力が上がっている学生は客観的には感情抑制力が上がる、という結果となった。この結果をどのように解釈すればいいのかについて、次に質的調査の分析を展開したい。

（２） 質的調査の結果

ａ． 調査の概要

上述の通り、インタビューにあたっては第 13 回（2015 年度）京都学生祭典実行委員の経験年数、部署、役職などを考慮し、サンプル抽出を行った。抽出にあたっては日常的に実行委員の活動に接している学生交流事業部職員からの助言を得た。その結果、22 名の実行委員が対象となった。22 名の内訳（インタビュー当時）は次の通りである。

学年　3 年生 16 名、2 年生 5 名、1 年生 1 名
部署　執行部 4 名、総務部 3 名、企画運営部 3 名、年間交流部 3 名
　　広報部 2 名、おどり普及部 2 名、営業部 3 名、警備部 2 名

インタビューは学生交流事業部職員が日程調整をした上で、笠井が聞き手となって 1 対 1 の対面式によりキャンパスプラザ京都 1 階の学生 Place＋にて行った。1 回あたり 30 分程度とし、趣旨説明と情報公開の形態について確認を取った上で、筆記による記録を取りながら行った。なお、22 名のうち、日程の調整が可能であった 11 名については本祭終了後に追加でインタビューをしたため、インタビューの述べ回数は 33 回である。

本調査は、実行委員自身の「成長観」、すなわち成長をどのように捉えているか自体の変化が成長を示すのではないかという仮説のもとで行われた。2 回にわたってインタビューを行えた実行委員についてはその前後の比較において、また、1 回しか行えない学生は他の学生との実行委員経歴を踏まえた比較において、同仮説からのアプローチを試みた。このことを踏まえて、1 回目のインタビューでは、次の内容について順に尋ねた。

①本人プロフィール（氏名、大学、学年、実行委員経歴）
②自身の仕事・活動や人付き合いにおける特徴
③「成長するとは何か」あるいは「成長していると感じるときはいつか」
④成長したいと今も感じているか
⑤実行委員になってから自身が成長した・変化したと感じることは何か
⑥実行委員としての活動の中で大きな存在と思う人や、影響を与えた経験は何か

2 回目のインタビューを行うことができた対象には、本祭はいったいどのような経験として位置づけられるのか、また、本祭後の自身の進路・展望等について聞いた。

ｂ．分析の方法
分析に際しては、まず、次の項目により筆記記録した語りを再構成した。

①2 年次の経験
②実行委員継続の理由
③成長とは何か
④成長したいのはどういった側面か
⑤実行委員としての学び・気づきは何か
⑥実行委員としての大きな存在・機会は何か
⑦（2 回目のみ）本祭を終えてどう感じるか
⑧特徴的なエピソード

この 8 つのカテゴリの内容を整理して似通った回答の傾向にあると思われるものをそれぞれグループにしたところ、3 群の特徴的なグループが 5 人、3 人、3 人で形成された。残りの 11 名については回答にばらつきが大きく、グループ化は困難であった。

量的調査で扱う PROG テストは、13 名については 2014 年の 10 月から 12 月に一度受検している。そして、本年度の 11 月から 12 月にかけても同様に PROG テストを受験しているため、各項目得点の推移が見られる。また、量的調査で扱う主観的評価のアンケートは事前、中間、事後の 3 回にわたり取られているが、13 名のうち 12 名が中間アンケートに答えている。

以上より、本稿ではインタビュー結果によって分けられたグループそれぞれについて、PROG テストの得点推移と中間アンケートにおける主観的評価を参考にグループごとの特性を描きだす方法を取る。次項より便宜的にグループに名称を付けて解説する。

c．グループごとの特徴

［c-1. 前向き素直型］

一つ目のグループは「前向き素直型」と名付けた。インタビュー調査においてこのグループに該当するのは22名中5名であった。このグループには次のような特徴がある。

○自分は明るくて人と話すのも好き。物事をポジティブに捉えることができる。切り替えるのが得意なので、仕事モードになっているときは「冷たい」と思われてしまうこともある。
○人の気持ちがわからなかったり、スケジュール管理が苦手だったりするが、悔しさを感じることが、成長への第一歩だ。
○1年生のときの祭典でも悔しさを感じたが、2年生になって人をまとめる立場に就くと新しい課題にも気づけた。いろいろな立場を経験して多様な視点を手に入れることが大事なようだ。ほかの人の考えやものの見方をどんどん引き出して取り入れたい。
○祭典の経験を活かして、人のためになる職に就きたい。本祭が終わったので、新しい一歩が踏み出せる。

このグループの実行委員は、自身の苦手なことを冷静に把握しているが、そのことに落胆して留まることがない。常に次を見据え、失敗や悔やみもポジティブに捉えて自身の成長につなげることができる。また、成長において多様な価値観・視点が重要であることと、自らもそれを身に付けることが目指されている。
量的調査との関連について見る。このグループの実行委員は、PROG テストにおけるコンピテンシー領域の得点は1回目においても平均値以上だったが、2回目ではさらに上がって全体の上位層を維持している。リテラシー領域の得点は1回目ではばらつきがあったが、2回目では軒並み上昇している。中間アンケートにおける自己評価のポイント平均は 3.3～4.0とやや高めであり「前向き力」の項目は5人中3人が最高点の5点を付けている。

［c-2. 関係性重視型］

二つ目のグループは「関係性重視型」と名付けた。インタビュー調査においてこのグループに該当するのは22名中3名であった。このグループには次のような特徴がある。

○スケジュール管理がうまくいかない。自分でしっかり考えてから発言していることもあり、頑固になってしまう。
○大学にチラシがあって興味があり祭典に入った。1年生のときは楽しかっただけで、2年生になって初めて役割を得て責任を感じた。友だちや家族が支えてくれた。
○できなかったことができるようになることが成長だ。成長できるのも、祭典の委員のように、一緒にやってきた仲間がいてこそだ。
○もっと自分の周りに目を向けたり、人に影響を与えられる人になったり、うまく人に頼れるようになりたい。
○祭典が終わったから、今はひとまず何も考えずゆっくりしたい。

このグループの実行委員は、始めた契機、続ける理由、成長の要因をすべて他者との関係

において説明している。前向き素直型同様に自身の苦手な点は冷静に把握できている。苦手なことや失敗してしまったことは周りの仲間が支えてくれるし、自身も周りの人に影響を与えられるようになることを望んでいる。
量的調査との関連について見る。このグループの実行委員はPROGテストにおけるコンピテンシー領域の得点は 1 回目では平均程度か下位層に位置し、リテラシーは平均を下回っていた。だが、2回目では両領域において急上昇して上位層になっている。中間アンケートにおける自己評価のポイント平均は2.8～3.5と平均的であった。

［c-3. 自信薄弱型］
三つ目のグループは「自信薄弱型」と名付けた。インタビュー調査においてこのグループに該当するのは22名中3名であった。このグループには次のような特徴がある。

○友だちと一緒に過ごすのは楽しい。仕事が多すぎると泣いてしまうこともある。きちんとできない人がいると腹が立つので叱るようにしている。
○途中で辞めたら負けだし、自分が部署では一番、活動に参加していたような気がするから、当然のことと思い委員を続けている。
○もっとマナーやスキルを身に付けたい。自分の悪いところはわかっているし、成長の機会はたくさんあるけど、根本的には自分というものは変えようがないのだから、そうした機会はうまく活かせないものだ。
○自分よりも周りの委員の方が優れている。やきもちもやくし、劣等感もある。

このグループの実行委員は、やや感情的になりがちであり、「友だち」以外の他者との関係は劣等感など負の感情によってのみ説明する。変化への意識が極めて低く、自身はそう変わるものではなく、あくまで流れに乗っているという語り方をとる。成長観も限定的であり、知識や技術に偏って認識されており、関係性や多様な視点といった観点は見られない。
量的調査との関連について見る。このグループの実行委員はPROGテストにおけるコンピテンシー領域の得点はばらつきが大きかった。2回目では両領域のうち、低い方に引きずられているかのように見える形で軒並み点数が下がっている。中間アンケートにおける自己評価のポイント平均は2.9～3.1と平均的であったが、「前向き力」は1点か2点を付けていた。

d．考察
上述の3グループに入らなかった11名の実行委員のうち、1名は「自信家型」とも言えるタイプでありポイントは終始上位層であったが他者との協働に不安が見られた。また、1名は「ネガティブ思考型」とも言えるタイプであり、1年間で急激にコンピテンシーが落ちた。残り9名のうち2名はデータ不備で量的調査との関連について言及できず、7名はポイントが終始平均的であったが質的にグループ化可能なエピソードが見られなかった。
本調査より、前向きさや他者との関係性に関心が強い場合には、それぞれ別の形で大きな成長がみられ、成長観も自身の技術・知識に限られない「多様性の受容」や「関係性の構築」に広がることがわかる。他方、自信がなくて感情的に物事を考えたりネガティブ思考に陥ったりする場合には、成長観が自身の能力に限定されるとともにコンピテンシーも

低下することがわかる。

京都学生祭典はインターカレッジであるため関係性の構築に比較的目が行きやすく、高い水準での成長観の設定も各種研修等の機会で意識的に行われている。そういった状況においてもなお、十分な成長が経験できない実行委員が一定数いることは留意すべきであろう。

5．結果と考察

個別の量的調査および質的調査の結果については、前項で述べているので、ここでは、全体的な結果と考察について述べる。

（1） PROG テストの結果について

全体として、コンピテンシーの伸びが大きい。そのなかでも特に、「協働力」対人基礎力の伸びが大きく、主観的に「前向き力」が伸びている。これらが伸びている学生は、「コミュニケーション力」の伸びと連動している。

この結果は、「チームでの作業や活動が多い」、「一人で完結する活動ではない」さらに他大学の学生、社会人、地域の方々など「多様な他者との出会い」を含む、京都学生祭典実行委員会活動の特徴によるものでないかと考えられる。

さらに、学生たちの数値をモデル社会人のものと比較すると、京都学生祭典実行委員の学生たちの事後の到達点が、親和力、協働力、実践力という点で、モデル社会人並みであることがわかる。これらは通常の PBL を経験した学生たちの数値と比較しても相当に高いものである。

（2） 客観的成長と実感のズレ

客観的には、全体的に概ね成長がみられ、自己評価でも、全体的に成長を実感している。しかし前向きに成長している学生もいる一方で、頑張っているのにあまり自信を持てず前向きになれていない学生も存在している。

学生たちの成長の仕方は様々であり、多様なタイプの学生の成長モデルを想定することが必要であることがわかる。またなかなか前向きになれず成長を実感できない学生（自信薄弱型）には、成長を自ら言語化し、前向きになれるようなカウンセリング的なサポートが必要かもしれない。

（3） 地域への愛着度

地域への愛着度を示す「京都 Love」の項目は、活動前の低い数値から伸びを示してはいる。ただ、祭典活動が特に影響しているとは学修活動アンケートの結果との関係性では断定できなかった。むしろ、友人や家族との交流、という「京都」での生活そのもの、また課題解決型授業などが関係していることがわかった。今後、地域連携活動が浸透していく上で、この数値がどう変化するかは注目に値するし、また京都について学習する機会が研修に加わると経験と知識の相乗効果で、地域への愛着度が高まるかもしれない。

（4） 学び合う関係性や場としての学生祭典

学習プログラムとして、教員などによって目標設定がされているわけではなく、学生たち

の希望に基づき企画され、緩やかな合意のもとに実践される活動である。

しかし、その中で学生たちは大きな成長を遂げており、学生祭典の実行委員会活動は、 インターカレッジでこそ出会う多様な仲間導師が学び合う関係性や場として、学生たちの「状況的学習」を促進しているといえる。これらは、正課における PBL とは異なり学習プログラムとしては設計者が不在である正課外活動の特徴を示している。

正課外であるため、学習ポートフォリオは存在せず、学生交流事業部職員が活動の伴奏者であり日常的なアドバイザーとしての役割を果たしている。そのため、学生の希望や状況を勘案しながら企画されている成長実感のための研修は効果をあげていると考えられる。

６．今後の研究課題

今回の研究にはいくつかの限界があった。①質的調査のインタビュー数に限りがあり、どのモデルにどのくらいの学生が該当するかなどの把握は難しく、精緻な資料化は困難であった。②部署ごとなどの母数も少なく、特色抽出や事前事後比較も難しかった。また１年間での成長評価をみたが、今後は、インターンシップなどのような長期的視点にたった成長評価が必要かもしれない。

本調査結果を踏まえ、以下の課題が明らかになった。

①全体のプログラム設計をどのように考えていくか。最終的な成果を何に求めるのか、個別の取組の評価、成長目標などの設定はどうするかを考える必要がある。

②成長実感を高めるため個別学生への教育的サポートについて、そもそもそういったものが必要かどうかを議論する必要があるし、もし必要なら実施することは可能かを検討する必要が生じる。

③2016 年度は、地域連携活動が強化される方向性だが、そのような活動が学生の成長にどう影響するかをみることはもちろん、地域側がどのように考えるかも調べ、学生交流事業の双方向的評価について検討する

④学生たちが活動を通じて成長していることが分かったが、その学生たちの実行委員終了後のキャリア開拓についてのフォロー体制はない。コンソーシアム事業を通じて成長した人材の地域定着も含めて、今後コンソーシアム全体で考えていくべき課題かもしれない。

参考資料1

PROG
PROGRESS REPORT ON GENERIC SKILLS

大学コンソーシアム京都　御中

基礎力測定テスト

PROG
追加分析報告書

2016.1.25
株式会社リアセック

CONTENTS

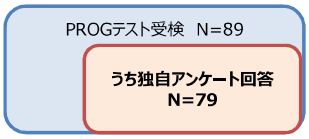
追加分析の概要 3

1．汎用能力の自己評価とPROG基礎力の相関分析
行動力～チームワーク力 5
全体サマリー（相関係数と有意確率） 17

2．各種活動の取り組み度合いと基礎力の重回帰分析 18

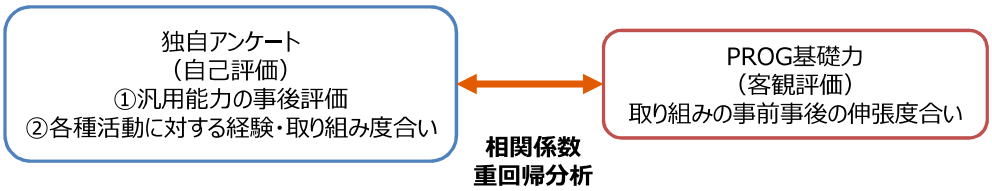
追加分析の概要

■集計対象サンプル：N＝76　※2回分のPROGスコアが測定できていないもの（N=4）、重回帰分析の対象項目の無回答者（N＝6）を除いた



■分析概要：
①独自アンケートによる学生の能力の自己評価（個人a1.行動力～a7.見通し力、他社への働きかけb1.コミュニケーション力～b5.チームワーク力）とジェネリックスキルの客観指標であるPROG基礎力との関連性の検証を行う

②独自アンケートの各種活動に対する学習経験と取り組み度合いQ5（自己評価： 1＝とても努力した～7＝経験しなかった）とPROG基礎力の事前事後のスコアを用いて、教育効果の検証を行う



3

PROG
PROGRESS REPORT ON GENERIC SKILLS

1.汎用能力の自己評価とPROGスコアとの相関分析

①個人　＜行動力＞

相関係数

●「行動力」の自己評価とPROG基礎力（客観評価）の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものは対人領域の**「協働力」**であった（有意確率１％未満）。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、対人領域の**「親和力」「統率力」**、対自己領域の全項目（**「感情制御力」、「自信創出力」、「行動持続力」）**、対課題領域の**「課題発見力」**で相関がみられる。
リテラシーはすべて相関がみられない。

■基礎力との相関関係：行動力

	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	0.01	0.10	0.01	-0.03	0.09	-0.11	0.13	0.42	0.39	0.34	0.22	0.32	0.42	0.38	0.24	0.31	0.36	0.27	0.10	0.17
有意確率	0.97	0.40	0.95	0.82	0.42	0.33	0.27	0.00	0.00	0.00	0.06	0.00	0.00	0.00	0.04	0.01	0.00	0.02	0.38	0.14
10%未満＝△ 5%未満＝○ 1%未満＝◎								◎	◎	◎	△	◎	◎	◎	○	◎	◎	○		

001_s1.相関

②個人　＜責任感＞

相関係数

●「責任感」の自己評価とPROG基礎力（客観評価）の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものは対人領域の**「協働力」**であった（有意確率１％未満）。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、リテラシーでは**「非言語処理力」**、コンピテンシーでは対人領域の**「親和力」**、対自己領域の全項目（**「感情制御力」、「自信創出力」、「行動持続力」）**、対課題領域の**「実践力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：責任感

	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	0.23	0.15	0.18	0.10	0.06	0.18	0.25	0.33	0.35	0.31	0.25	0.32	0.40	0.17	0.21	0.32	0.22	0.17	0.18	0.32
有意確率	0.05	0.18	0.12	0.37	0.60	0.12	0.03	0.00	0.00	0.01	0.03	0.00	0.00	0.15	0.07	0.01	0.06	0.14	0.11	0.01
10%未満＝△ 5%未満＝○ 1%未満＝◎	○						○	◎	◎	◎	○	◎	◎		△	◎	△			◎

002_s2.相関

③個人　＜楽しむマインド＞

相関係数

●「楽しむマインド」の自己評価とPROG基礎力（客観評価）の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものは対自己領域の全項目（**「感情制御力」、「自信創出力」、「行動持続力」**）であった（有意確率１％未満）。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、リテラシーで**「課題発見力」**、コンピテンシーでは対人領域の全項目（**「親和力」「協働力」「統率力」**）、対課題領域の**「実践力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：楽しむマインド

	リテラシー							コンピテンシー												
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
												親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	0.09	0.04	0.16	0.21	0.11	0.12	0.05	0.40	0.32	0.47	0.16	0.29	0.33	0.24	0.42	0.43	0.41	0.17	0.05	0.27
有意確率	0.43	0.71	0.18	0.06	0.35	0.31	0.64	0.00	0.00	0.00	0.18	0.01	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.15	0.67	0.02
10%未満＝△ 5%未満＝○ 1%未満＝◎				△				◎	◎	◎		○	◎	○	◎	◎	◎			○

④個人　＜京都LOVE（地域愛）＞

相関係数

●「京都LOVE（地域愛）」の自己評価とPROG基礎力の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものはない。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、対人領域の**「統率力」**、対自己領域の**「自信創出力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：京都LOVE（地域愛）

	リテラシー							コンピテンシー												
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
												親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	0.03	0.01	0.10	0.08	0.05	-0.04	-0.05	0.20	0.22	0.17	0.09	0.17	0.19	0.27	0.17	0.24	0.09	0.18	0.01	0.10
有意確率	0.80	0.90	0.40	0.50	0.65	0.76	0.69	0.08	0.06	0.15	0.44	0.14	0.11	0.02	0.14	0.03	0.46	0.13	0.96	0.40
10%未満＝△ 5%未満＝○ 1%未満＝◎								△	△					○		○				

⑤個人　＜前向き力＞

相関係数

●「前向き力」の自己評価とPROG基礎力（客観評価）の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものは対自己領域の**「感情制御力」**であった（有意確率１％未満）。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、リテラシーでは**「課題発見力」**、コンピテンシーでは対人領域の全項目（**「親和力」「協働力」「統率力」**）、対自己領域では**「自信創出力」「行動持続力」**、対課題領域の**「課題発見力」「実践力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：前向き力

	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	-0.01	0.04	0.14	0.21	-0.01	0.17	0.11	0.42	0.34	0.41	0.28	0.30	0.35	0.31	0.50	0.34	0.32	0.26	0.17	0.27
有意確率	0.90	0.74	0.21	0.07	0.95	0.14	0.36	0.00	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.02	0.14	0.02
10%未満＝△ 5％未満＝○ 1％未満＝◎				△				◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○		○

006.p6 相関

9

⑥個人　＜論理的思考力＞

相関係数

●「論理的思考力」の自己評価とPROG基礎力（客観評価）の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものは対自己領域の**「課題発見力」**であった（有意確率１％未満）。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、リテラシーでは**「課題発見力」**、コンピテンシーでは対人領域の**「協働力」「統率力」**、対自己領域では**「自信創出力」「行動持続力」**、対課題領域の**「計画立案力」「実践力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：論理的思考力

	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	0.15	0.03	0.19	0.23	0.14	0.11	0.09	0.32	0.26	0.28	0.40	0.15	0.27	0.25	0.17	0.31	0.25	0.50	0.31	0.25
有意確率	0.19	0.78	0.10	0.04	0.24	0.35	0.41	0.00	0.02	0.02	0.00	0.19	0.02	0.03	0.14	0.01	0.03	0.00	0.01	0.03
10%未満＝△ 5％未満＝○ 1％未満＝◎				○				◎	○	○	◎		○	○		◎	○	◎	◎	○

006.p6 相関

10

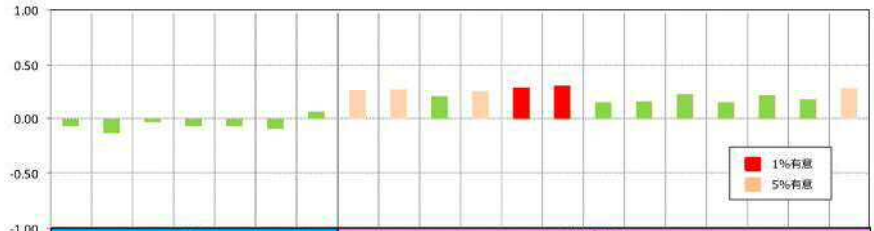
⑦個人　＜見通し力＞

相関係数

●「見通し力」の自己評価とPROG基礎力の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものはない。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、対人領域の**「親和力」「協働力」**、対自己領域の**、「自信創出力」、**対課題領域の**「課題発見力」「実践力**」で相関がみられる。
有意確率は低いが、リテラシーでは「非言語処理力」以外、逆相関となっている。

■基礎力との相関関係：見通し力



	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	-0.07	-0.13	-0.04	-0.07	-0.07	-0.10	0.07	0.26	0.28	0.20	0.25	0.30	0.31	0.15	0.16	0.22	0.15	0.21	0.18	0.28
有意確率	0.53	0.25	0.76	0.56	0.55	0.39	0.57	0.02	0.02	0.08	0.03	0.01	0.01	0.20	0.17	0.06	0.20	0.06	0.12	0.01
10%未満＝△ 5%未満＝○ 1%未満＝◎								○	○	△	○	◎	◎			△		△		○

001.v1.相関

11

⑧他者への働きかけ　＜コミュニケーション力＞

相関係数

●「コミュニケーション力」の自己評価とPROG基礎力（客観評価）の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものは対人領域の**「協働力」**であった（有意確率１％未満）。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、コンピテンシーでは対人領域の**「親和力」「統率力」**、対自己領域の全項目（**「感情制御力」「自信創出力」「行動持続力」**）、対課題領域の**「課題発見力」「実践力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：コミュニケーション力

	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	0.13	0.09	0.06	0.04	0.06	0.05	0.09	0.39	0.45	0.31	0.24	0.37	0.40	0.31	0.23	0.27	0.29	0.26	0.19	0.25
有意確率	0.28	0.46	0.63	0.76	0.61	0.67	0.42	0.00	0.00	0.01	0.03	0.00	0.00	0.01	0.05	0.02	0.01	0.02	0.10	0.03
10%未満＝△ 5%未満＝○ 1%未満＝◎								◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	○	○	○	○		○

006.v1.相関

12

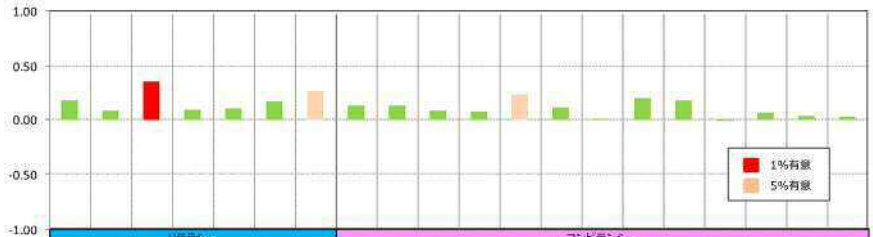
⑨他者への働きかけ ＜協力を得る力＞

相関係数

●「協力を得る力」の自己評価とPROG基礎力の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものはない。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、リテラシーの**「情報分析力」「非言語処理力」**、対人領域の**「親和力」**、対自己領域の**「感情制御力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：協力を得る力



	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	0.17	0.08	0.37	0.09	0.10	0.16	0.27	0.12	0.13	0.08	0.07	0.23	0.11	0.00	0.20	0.18	-0.01	0.07	0.03	0.02
有意確率	0.13	0.50	0.00	0.46	0.37	0.16	0.02	0.29	0.28	0.48	0.56	0.05	0.34	0.99	0.09	0.13	0.94	0.58	0.81	0.87
10%未満＝△ 5%未満＝○ 1%未満＝◎			◎				○					○			△					

13

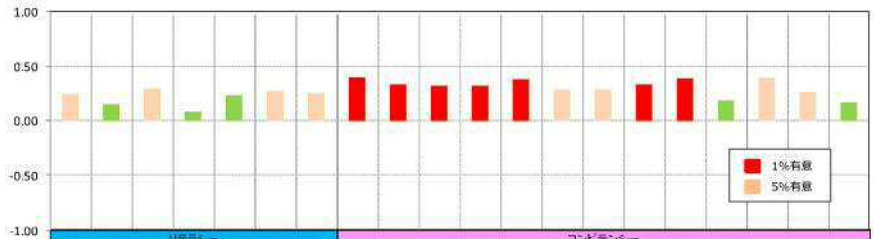
⑩他者への働きかけ ＜伝える力＞

相関係数

●「伝える力」の自己評価とPROG基礎力（客観評価）の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものは対課題領域の**「課題発見力」**であった（有意確率１％未満）。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、リテラシーでは**「情報分析力」「構想力」「言語処理力」「非言語処理力」**、コンピテンシーでは対人領域の全項目（**「親和力」「協働力」「統率力」）**、対自己領域の**「感情制御力」「自信創出力」**、対課題領域の**「計画立案力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：伝える力



	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	0.24	0.14	0.29	0.08	0.23	0.28	0.25	0.39	0.33	0.32	0.32	0.38	0.28	0.28	0.33	0.39	0.19	0.40	0.25	0.16
有意確率	0.04	0.22	0.01	0.51	0.05	0.01	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.11	0.00	0.03	0.16
10%未満＝△ 5%未満＝○ 1%未満＝◎	○		○		○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	◎		◎	○	

14

⑪他者への働きかけ ＜多様性の理解＞

相関係数

●「多様性の理解」の自己評価とPROG基礎力の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものはない。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、リテラシーの**「非言語処理力」**、対人領域の**「親和力」「協働力」**、対課題領域の**「課題発見力」「計画立案力」「実践力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：多様性の理解

	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	0.12	-0.07	0.06	0.02	0.10	0.15	0.25	0.21	0.18	0.14	0.36	0.21	0.23	0.07	0.15	0.17	0.09	0.38	0.31	0.20
有意確率	0.30	0.54	0.58	0.86	0.38	0.21	0.03	0.07	0.11	0.24	0.00	0.07	0.05	0.53	0.21	0.15	0.44	0.00	0.01	0.08
10%未満＝△ 5%未満＝○ 1%未満＝◎							○	△			◎	△	○					◎	◎	△

⑫他者への働きかけ ＜チームワーク力＞

相関係数

●「チームワーク力」の自己評価とPROG基礎力（客観評価）の関係性をみるために、相関係数を算出した。

●リテラシー６項目とコンピテンシーの中分類の９項目の中で、相関係数が±0.4以上の相関がみられるものは対人領域の**「親和力」**であった（有意確率１％未満）。
±0.2～0.4未満の弱い相関では、コンピテンシーの対人領域の**「協働力」「統率力」**、対自己領域の全項目（**「感情制御力」「自信創出力」「行動持続力」）**、対課題領域の**「課題発見力」「実践力」**で相関がみられる。

■基礎力との相関関係：チームワーク力

	リテラシー							コンピテンシー												
												対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
相関係数	-0.05	-0.13	-0.03	0.02	-0.08	-0.19	-0.04	0.37	0.35	0.37	0.17	0.43	0.34	0.21	0.35	0.33	0.27	0.20	0.11	0.30
有意確率	0.64	0.26	0.81	0.86	0.52	0.11	0.72	0.00	0.00	0.00	0.14	0.00	0.00	0.07	0.00	0.00	0.02	0.08	0.35	0.01
10%未満＝△ 5%未満＝○ 1%未満＝◎								◎	◎	◎		◎	◎	△	◎	◎	○	△		◎

2. 取り組み度合いと基礎力 ⑩全体サマリー

相関係数

（凡例：1％有意　5％有意）　10％有意）

	リテラシー							コンピテンシー													アンケート（自己評価）										
	総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力			行動力	責任感	楽しむマインド	京都LOVE（地域愛）	前向き力	論理的思考力	見通し力	コミュニケーション力	協力を得る力	伝える力	多様性の理解	チームワーク力
												親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力												
行動力	0.005	0.098	0.008	-0.027	0.094	-0.112	0.128	0.415	0.392	0.344	0.219	0.323	0.420	0.379	0.237	0.315	0.363	0.269	0.103	0.169	1.000										
責任感	0.230	0.154	0.181	0.104	0.060	0.179	0.247	0.378	0.352	0.314	0.253	0.323	0.401	0.167	0.208	0.315	0.215	0.173	0.183	0.318	0.313	1.000									
楽しむマインド	0.092	0.044	0.155	0.214	0.110	0.119	0.054	0.395	0.322	0.466	0.155	0.287	0.327	0.239	0.418	0.434	0.412	0.165	0.050	0.274	0.231	0.273	1.000								
京都LOVE（地域愛）	0.029	0.014	0.098	0.078	0.052	-0.036	-0.046	0.202	0.216	0.166	0.089	0.172	0.185	0.267	0.171	0.243	0.087	0.177	0.006	0.098	0.148	0.151	0.193	1.000							
前向き力	-0.014	0.038	0.144	0.212	-0.007	0.170	0.107	0.415	0.339	0.415	0.276	0.303	0.347	0.312	0.499	0.339	0.325	0.261	0.169	0.266	0.175	0.402	0.475	0.094	1.000						
論理的思考力	0.151	0.032	0.187	0.232	0.136	0.109	0.095	0.320	0.261	0.275	0.399	0.151	0.270	0.253	0.171	0.308	0.251	0.498	0.308	0.248	0.165	0.140	0.275	0.124	0.276	1.000					
見通し力	-0.074	-0.134	-0.035	-0.068	-0.069	-0.101	0.066	0.258	0.277	0.204	0.253	0.300	0.311	0.149	0.159	0.220	0.149	0.213	0.178	0.284	0.376	0.451	0.381	0.290	0.337	0.455	1.000				
コミュニケーション力	0.126	0.085	0.056	0.036	0.059	0.050	0.095	0.390	0.448	0.314	0.244	0.372	0.405	0.312	0.229	0.273	0.285	0.261	0.188	0.246	0.217	0.448	0.348	0.220	0.275	0.495	0.559	1.000			
協力を得る力	0.174	0.078	0.365	0.086	0.103	0.163	0.268	0.122	0.126	0.083	0.068	0.229	0.111	0.002	0.197	0.175	-0.008	0.065	0.028	0.020	0.278	0.329	0.355	-0.002	0.342	0.153	0.244	0.334	1.000		
伝える力	0.238	0.142	0.291	0.077	0.227	0.280	0.247	0.395	0.333	0.323	0.325	0.384	0.282	0.283	0.328	0.387	0.185	0.397	0.253	0.163	0.213	0.360	0.226	0.337	0.319	0.367	0.359	0.495	0.420	1.000	
多様性の理解	0.121	-0.072	0.064	0.021	0.102	0.147	0.250	0.206	0.185	0.135	0.357	0.211	0.230	0.073	0.145	0.166	0.090	0.382	0.305	0.204	0.238	0.384	0.143	0.114	0.232	0.360	0.452	0.416	0.353	0.480	1.000
チームワーク力	-0.055	-0.131	-0.028	0.020	-0.075	-0.186	-0.042	0.370	0.352	0.368	0.172	0.429	0.336	0.209	0.354	0.329	0.275	0.204	0.108	0.298	0.351	0.472	0.326	0.177	0.324	0.333	0.491	0.468	0.368	0.449	0.411	1.000

17

PROG
PROGRESS REPORT ON
GENERIC SKILLS

2. 各種活動の取組み度合いと PROGスコアとの重回帰分析

1：分析概要

重回帰分析

■分析内容
学生の成長を基礎力の変化（活動の事前のスコアと事後のスコアの変化）と置き、
活動事後の基礎力のうち下記の６項目の基礎力を従属変数（y）、活動前の基礎力と取り組み内容を独立変数（x）とし、
重回帰分析を実施した。

◆独立変数を絞り込む基準は以下の通りである。
1）多重共線性の確認のために相関分析を行い、独立変数同士の相関関係を確認
2）強い相関があるものはないことを確認できたため、ステップワイズ法にて重回帰分析を行った
（※独立変数のうち各種活動の多くが除去される結果となったことから、全項目を投入した強制投入法の結果も参考に提示）

＜従属変数＞

下記項目の学生祭典活動後のスコア
（計６項目）

リテラシー　①総合
　　②課題発見力
コンピテンシー　③総合
　　④課題発見力

事前事後の伸びが大きかった
コンピテンシーの下記２項目
（※次頁参照）
コンピテンシー　⑤実践力
　　⑥協働力

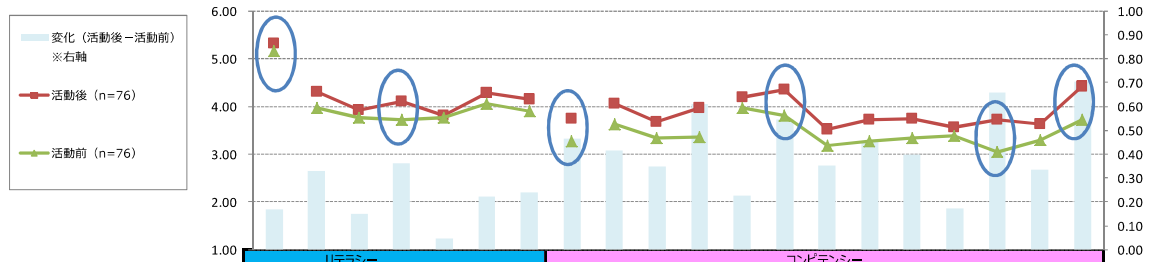
＜独立変数＞

左記の従属変数の各活動前スコアと
下記の各種学習（活動）経験
（とても努力した＝6～まったく努力しなかった＝1
※経験しなかった＝0）

①授業（講義・演習等）
②課題解決型・実践型授業
③学内イベントの企画・運営等
④部活・サークル
⑤インターンシップ・実習
⑥ボランティア学習
⑦アルバイト
⑧学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）
⑨ボランティア・NPO活動
⑩友人や家族との交流
⑪家族との交流や世話
⑫趣味・習い事

※参考. 学生祭典の前後のPROG基礎力の変化

■PROG基礎力スコア×学生祭典活動前後の比較



		リテラシー							コンピテンシー												
		総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理力	非言語処理力	総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
													親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
変化（活動後－活動前） ※右軸		0.17	0.33	0.15	0.36	0.05	0.22	0.24	0.47	0.42	0.35	0.61	0.22	0.54	0.35	0.45	0.40	0.17	0.66	0.33	0.70
スコア	活動後（n=76）	5.32	4.30	3.92	4.09	3.82	4.29	4.14	3.74	4.05	3.68	3.96	4.20	4.36	3.53	3.72	3.74	3.55	3.71	3.63	4.42
	活動前（n=76）	5.15	3.97	3.77	3.73	3.77	4.07	3.91	3.27	3.64	3.34	3.35	3.97	3.81	3.18	3.27	3.34	3.38	3.05	3.30	3.72

101_PROGスコア_前後比較

◯ で囲まれた6項目を目的変数として分析

※参考. 相関係数

（凡例：　1％有意　5％有意）　10%有意）

相関係数	[前回]リテラシー総合	[前回]リテラシー課題発見力	[前回]総合評価	[前回]課題発見力	[前回]協働力	[前回]実践力	授業（講義・演習等）	課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	学内イベントの企画・運営等	部活・サークル	インターンシップ・実習	ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	アルバイト	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	友人や家族との交流	家族との交流や世話	趣味・習い事
[前回]リテラシー総合	1																	
[前回]リテラシー課題発見力	.620	1																
[前回]総合評価	.022	.033	1															
[前回]課題発見力	.244	.185	.483	1														
[前回]協働力	-.066	-.025	.826	.255	1													
[前回]実践力	.017	-.070	.378	.224	.317	1												
授業（講義・演習等）	-.073	.068	-.067	-.115	-.042	.193	1											
課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	.051	.127	.011	.097	-.100	-.171	.244	1										
学内イベントの企画・運営等	.001	-.087	.088	.127	-.024	.007	.172	.287	1									
部活・サークル	-.011	-.121	.117	.058	.082	.050	-.053	.187	.269	1								
インターンシップ・実習	.039	-.030	.026	.014	-.078	.041	.003	-.009	.305	.312	1							
ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	.028	.154	.079	-.078	.093	.213	.185	-.021	.134	.019	.194	1						
アルバイト	-.043	-.196	.008	-.265	.130	-.092	.001	.049	.011	.035	.149	.130	1					
学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	.023	.003	.257	-.206	.297	.017	.033	-.193	-.158	-.116	.085	.101	-.036	1				
ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	.052	.036	.246	.100	.164	-.008	.019	.005	.161	.112	.050	.152	-.157	.092	1			
友人や家族との交流	-.046	.007	.244	.025	.294	.129	.253	.092	.153	.046	-.012	.140	.192	.133	-.032	1		
家族との交流や世話	.002	.066	.087	.012	.146	.051	.041	.165	.239	.095	.098	.016	.187	-.079	.057	.508	1	
趣味・習い事	.080	.022	.096	-.068	.220	.132	.018	.007	.098	.139	.079	.195	.315	.118	.142	.390	.383	1

集計結果_相関行列

2. 重回帰分析の結果 ＜モデルの要約＞

重回帰分析

■ステップワイズ法

		R	R2 乗（決定係数）	調整済 R2 乗（調整済決定係数）	推定値の標準誤差	補足
リテラシー	総合	.526[a]	.276	.265	1.157	a. 予測値: (定数)、[前回]リテラシー総合
	課題発見力	.686[a]	.470	.461	0.633	a. 予測値: (定数)、[前回]リテラシー課題発見力
コンピテンシー	総合	.778[b]	.605	.592	1.056	b. 予測値: (定数)、[前回]総合評価, 学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）
	課題発見力	.682[b]	.465	.448	1.229	b. 予測値: (定数)、[前回]課題発見力, 授業（講義・演習等）
	実践力	.464[b]	.215	.189	1.399	b. 予測値: (定数)、[前回]実践力, 友人や家族との交流
	協働力	.676[a]	.457	.448	1.426	a. 予測値: (定数)、[前回]協働力

■強制投入法（調整）

		R	R2 乗（決定係数）	調整済 R2 乗（調整済決定係数）	推定値の標準誤差	補足
コンピテンシー	協働力	.684[a]	.467	.451	1.399	a. 予測値: (定数)、学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）, [前回]協働力。

■参考：全項目強制投入時

		R	R2 乗（決定係数）	調整済 R2 乗（調整済決定係数）	推定値の標準誤差
リテラシー	総合	.607[a]	.368	.204	1.204
	課題発見力	.722[a]	.522	.397	0.670
コンピテンシー	総合	.802[a]	.643	.550	1.109
	課題発見力	.725[a]	.525	.402	1.279
	実践力	.595[a]	.354	.186	1.401
	協働力	.725[a]	.525	.402	1.484

2. 重回帰分析の結果 ①リテラシー総合

重回帰分析

●リテラシー総合はステップワイズ法で「前回リテラシー」のみが採用となった。ただし決定係数は0.265と低い。

$$y_{it} = \beta y_{i,t-1} + \alpha\delta_i$$

リテラシー総合の事後スコア　0.350×リテラシー総合の事前スコア　＋3.569（定数）

ステップワイズ法		係数	有意確率
β	[前回]リテラシー総合	0.350	0%
	定数	3.569	0%
		N=	70

※参考

強制投入法		係数	有意確率
β	[前回]リテラシー総合	0.513	0%
α	授業（講義・演習等）	0.035	78%
	課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	-0.004	98%
	学内イベントの企画・運営等	0.092	49%
	部活・サークル	0.018	89%
	インターンシップ・実習	0.110	41%
	ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	-0.011	93%
	アルバイト	-0.141	27%
	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	-0.080	52%
	ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	-0.172	16%
	友人や家族との交流	-0.179	24%
	家族との交流や世話	0.059	70%
	趣味・習い事	0.061	66%
		N=	70
		R2=	0.204

23

2. 重回帰分析の結果 ②リテラシー課題発見力

重回帰分析

●リテラシー総合はステップワイズ法で「前回課題発見力」のみが採用となった（決定係数は0.461）。

$$y_{it} = \beta y_{i,t-1} + \alpha\delta_i$$

リテラシー課題発見の事後スコア　0.418×リテラシー課題発見の事前スコア　＋2.692（定数）

ステップワイズ法		係数	有意確率
β	[前回]リテラシー課題発見力	0.418	0%
	定数	2.692	0%
		N=	70
		R2=	0.461

※参考

強制投入法		係数	有意確率
β	[前回]リテラシー課題発見力	0.679	0%
α	授業（講義・演習等）	0.030	78%
	課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	0.047	68%
	学内イベントの企画・運営等	0.130	27%
	部活・サークル	-0.012	91%
	インターンシップ・実習	-0.019	87%
	ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	0.030	78%
	アルバイト	-0.059	60%
	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	-0.070	52%
	ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	-0.151	16%
	友人や家族との交流	-0.032	80%
	家族との交流や世話	-0.045	74%
	趣味・習い事	0.093	44%
		N=	70
		R2=	0.397

24

2. 重回帰分析の結果 ③コンピテンシー総合

重回帰分析

●コンピテンシー総合はステップワイズ法で「前回コンピテンシー総合」と「学生祭典」が採用となった。
決定係数は0.592と高い。

$$y_{it} = \beta y_{i,t-1} + \alpha \delta_i$$

コンピテンシー総合の事後スコア　0.705×コンピテンシー総合の事前スコア　+0.316×学生祭典　−0.202（定数）

ステップワイズ法		係数	有意確率
β	[前回]総合評価	0.705	0%
α	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	0.316	3%
	定数	-0.202	78%
		N=	70
		R2=	0.592

※参考

強制投入法		係数	有意確率
β	[前回]コンピテンシー総合評価	0.699	0%
α	授業（講義・演習等）	0.005	96%
	課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	0.039	68%
	学内イベントの企画・運営等	-0.012	90%
	部活・サークル	0.007	94%
	インターンシップ・実習	-0.112	26%
	ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	-0.056	53%
	アルバイト	0.046	63%
	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	0.212	3%
	ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	0.032	73%
	友人や家族との交流	-0.077	51%
	家族との交流や世話	0.101	38%
	趣味・習い事	0.097	36%
		N=	70
		R2=	0.550

25

2. 重回帰分析の結果 ④コンピテンシー課題発見力

重回帰分析

●コンピテンシー総合はステップワイズ法で「前回課題発見力」と「授業（講義・演習等）」が採用となった。
決定係数は0.448と比較的高い。

$$y_{it} = \beta y_{i,t-1} + \alpha \delta_i$$

コンピテンシー課題発見力の事後スコア　0.653×コンピテンシー課題発見力の事前スコア　+0.355×授業（講義・演習等）　+0.406（定数）

ステップワイズ法		係数	有意確率
β	[前回]課題発見力	0.653	0%
α	授業（講義・演習等）	0.355	3%
	(定数)	0.406	59%
		N=	70
		R2=	0.448

※参考

強制投入法		係数	有意確率
β	[前回]課題発見力	0.703	0%
α	授業（講義・演習等）	0.202	7%
	課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	0.065	56%
	学内イベントの企画・運営等	-0.131	26%
	部活・サークル	0.021	85%
	インターンシップ・実習	-0.007	96%
	ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	0.048	64%
	アルバイト	-0.048	68%
	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	0.160	16%
	ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	0.056	60%
	友人や家族との交流	0.022	87%
	家族との交流や世話	0.019	89%
	趣味・習い事	-0.102	40%
		N=	70
		R2=	0.402

26

2. 重回帰分析の結果 ⑤コンピテンシー実践力

重回帰分析

●コンピテンシー実践力はステップワイズ法で「前回コンピテンシー実践力」と「友人や家族との交流」が採用となった。
ただし、決定係数は0.189と低い。

$$y_{it} = \beta y_{i,t-1} + \alpha \delta_i$$

コンピテンシー実践力の事後スコア　0.354×コンピテンシー実践力の事前スコア　+0.352×友人や家族との交流　+1.497(定数)

ステップワイズ法		係数	有意確率
β	[前回]実践力	0.354	0%
α	友人や家族との交流	0.352	4%
	(定数)	1.497	9%
		N=	70
		R2=	0.189

※参考

強制投入法		係数	有意確率
β	[前回]実践力	0.340	1%
α	授業（講義・演習等）	0.059	65%
	課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	0.183	17%
	学内イベントの企画・運営等	-0.228	9%
	部活・サークル	0.166	20%
	インターンシップ・実習	-0.133	32%
	ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	0.168	18%
	アルバイト	-0.116	38%
	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	0.085	50%
	ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	-0.005	96%
	友人や家族との交流	0.222	15%
	家族との交流や世話	0.026	87%
	趣味・習い事	-0.021	88%
		N=	70
		R2=	0.186

27

2. 重回帰分析の結果 ⑥コンピテンシー協働力

重回帰分析

●コンピテンシー協働力はステップワイズ法で「前回コンピテンシー協働力」のみが採用となった（決定係数は0.448）。
●強制投入法にて、「学生祭典」を投入してみると、「学生祭典」の有意確率は11%だが、決定係数が0.451に上がった。→こちらのモデルを採用。

$$y_{it} = \beta y_{i,t-1} + \alpha \delta_i$$

コンピテンシー協働力の事後スコア　0.616×コンピテンシー協働力の事前スコア　+0.301×学生祭典　+0.499(定数)

強制投入法（調整済み）		係数	有意確率
β	[前回]協働力	0.616	0%
α	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	0.301	11%
	定数	0.499	60%
		N=	70
		R2=	0.451

※参考

ステップワイズ法		係数	有意確率
β	[前回]協働力	0.666	0%
	定数	1.921	0%
		N=	70
		R2=	0.448

強制投入法		係数	有意確率
β	[前回]協働力	0.607	0%
α	授業（講義・演習等）	-0.122	26%
	課題解決型・実践授業（大学の授業または学内プロジェクト等）	0.065	56%
	学内イベントの企画・運営等	0.046	69%
	部活・サークル	-0.036	75%
	インターンシップ・実習	-0.047	68%
	ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	0.041	69%
	アルバイト	0.097	38%
	学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	0.192	9%
	ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	0.001	99%
	友人や家族との交流	-0.124	35%
	家族との交流や世話	0.111	41%
	趣味・習い事	0.059	63%
		N=	70
		R2=	0.402

28

参考資料2-1

京都学生祭典実行委員の活動を通じた成長についてのアンケート【事前調査】

この調査は、京都学生祭典実行委員のみなさんが、委員の活動を通じて何を学び身に付けたのかを通じ、今後の京都学生祭典の活動をより発展させるために実施するものです。この調査は、回答は、すべて統計的に処理しますので、みなさんのプライバシーが知られる可能性はありません。また、調査結果は、論文や報告書の形で、公表することがありますが、その場合も、回答者個人を特定できない方法と形式で行います。ご協力いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

問い合わせ先
公益財団法人大学コンソーシアム京都
学生交流事業部　中本雅和
Tel:075-353-9189　Fax:075-353-9121
E-mail:gk-ml@consortium.or.jp

部署名：　　大学名：　　回生　　氏名：

※以下、各項目のあてはまる得点マスに○をつけ、その理由や根拠、コメントを必ず記入してください

第13回京都学生祭典評価シート			/	評価の理由・根拠・コメント（具体的にお書き下さい）
分類	項目	内容	事前評価	
個人	行動力	何をしたらいいか分からず、行動できない	1	
		周りからの指示があれば、行動できる	2	
		周りからの指示がなくても行動できるが、目標を意識していないことが多い	3	
		自分で判断して行動できるが、目標を達成できることが少ない	4	
		自分で判断して行動し、目標を達成することができる	5	
	責任感	自分の役割が分からず、役割を果たしていない	1	
		自分の役割を把握しているが、自分の役割を果たしていない	2	
		自分の役割を把握して、自分の役割を果たそうとチャレンジしているが、できていないことがある	3	
		自分の役割を把握して、自分の役割を果たしている	4	
		自分の役割の範囲だけでなく、全体を把握して、最後まで諦めずに自分の役割を果たしている	5	
	楽しむマインド	なぜやっているのか分からず、何もしていない	1	
		なぜやっているのか分からないまま、タスクとしてやっている	2	
		活動の目的を理解しているが、やりがいが見いだせない	3	
		活動の目的を理解して、日々の活動を楽しんでいる	4	
		活動の目的に共感し、やりがいを感じながら活動を楽しんでいる	5	
	京都LOVE（地域愛）	京都に興味関心がなく、京都のことを説明することができない	1	
		京都に興味関心はあるが、京都のことを説明することができない	2	
		京都に興味関心があり、京都のことを説明することができる	3	
		京都に高い興味関心があり、自ら京都の魅力を発見し、周囲に発信することができる	4	
		京都に高い興味関心があり、自ら京都の魅力を発見し、その魅力を元に新たな価値を生み出すことができる	5	
	前向き力	つらい状況になった時に、くよくよ考えてしまい、気持ちの切り替えができない	1	
		つらい状況になった時に、時々気持ちの切り替えができる	2	
		つらい状況になった時でも気持ちの切り替えができる	3	
		つらい状況になった時に、前向きに行動できる	4	
		どのような状況下でも、前向きに行動できる	5	
	論理的思考力	考えようとしない。または、一つ一つの情報すら理解できない	1	
		一つ一つの情報は理解できるが、それらの関係性は分からない。	2	
		一つ一つの情報を理解することができ、それらの関係性も理解できる。	3	
		関係性を理解した上で全体の中での位置づけをすることができる	4	
		情報を理解し、組み立てて活用することができる	5	
	見通し力	課題が分からず、目の前の個人の仕事に対して着手できない	1	
		目の前の個人の仕事に対して着手することができる	2	
		自分の部署の企画の流れを理解し、実行に移すことができる	3	
		学生祭典全体の流れを捉える事ができ、優先順位を付けて、実行に移すことができる	4	
		学生祭典全体の流れを捉える事ができ、優先順位を付けて実行に移すことができ、不測の事態を予想することができる	5	
他者への働きかけ	コミュニケーション力	相手を理解しようとしない。または、相手の話を理解できない	1	
		相手の話は理解できるが、自分の意見を相手に理解してもらうことができない	2	
		相手の話を理解し、また自分の意見を相手に理解してもらうことができる	3	
		背景を含め、お互いに理解を深めて、より有益な関連情報等を交換し合える	4	
		背景を含め、お互いに理解を深めて、より有益な関連情報等を交換した上で、更なる協力を得ることができる。	5	
	協力を得る力	誰にも相談せず、自分で抱え込んでしまう	1	
		誰にも相談せず、自分で抱え込み、自分一人で解決しようとする	2	
		解決に向けて、自ら周りの人から意見を聞くことができる	3	
		解決に向けて、自ら周りの人から意見を聞いて、協力を得ることができる	4	
		解決に向けて、周りの人が同じ目標に向かって行動してくれる	5	
	伝える力	言いたいことが分からない	1	
		言いたいことはあるが、うまくまとまらず、言葉にすることができない	2	
		言いたいことを言葉にすることができる	3	
		分かりやすく自分の言葉で説明することができる	4	
		分かりやすく自分の言葉で説明し、相手が理解してくれる	5	
他者への働きかけ	多様性の理解	チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場に関心がない	1	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場に関心はあるが、理解はできない	2	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場に関心があり、理解をしているが、それを踏まえて行動することができない	3	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場を理解して、行動することができる	4	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場を理解し、新たな価値を創造することができる	5	
	チームワーク力	人の意見を理解することができず、一緒に行動することができない	1	
		チームの一員として動くことができる	2	
		自分の役割を自覚して、チームの一員として動くことができる	3	
		チームメンバーとして動くことができ、チームメンバーの良さを引き出すことができる	4	
		チームメンバーの良さを引き出し、お互いの足りない部分を補う事ができる	5	

問1　あなたの「性別」と「年齢」を教えてください。
1. 女性　　2. 男性　　3. どちらとも言えない　　年齢（　　）歳

問2　あなたの実行委員会の活動についてお伺いします。
①今年で何回目の実行委員になりますか。

1. 一回目　　2. 二回目　　3. 三回目

②担当部署は、次のどれにあたりますか。また、昨年以前にも活動をされていた場合、その活動についてもあてはまる数字をご記入ください。
1. 執行部（四役）　2. 企画運営部　3. 広報部　4. 営業部　5. 警備部　6. おどり普及部　7. 年間交流部　8. 総務部　9.未定

今回[_____]　　前回[_____]　　前々回[_____]

問3　あなたの高校までの生活で努力したものから順に、[____]内に1～3の番号をつけてください。
[_____]学校の勉強　　[_____]ボランティア活動　　[_____]部活動　　[_____]アルバイト・仕事
[_____]友人や恋人との交流　　[_____]塾　　[_____]家族との交流や世話　　[_____]趣味・習い事

問4　あなたの高校までの学業成績は、次のどれにあたりますか。あてはまる選択肢に一つだけ○をしてください。

1. 上　　2. 中の上　　3. 中　　4. 中の下　　5. 下

問5　あなたはこれまでの大学生活で次にあげる項目についてどの程度努力しましたか。あてはまる選択肢に一つだけ○をしてください。

	とても努力した			←→		まったく努力しなかった	（経験しなかった）
1. 授業（講義・演習等）	1	2	3	4	5	6	7
2. 課題解決型学習（大学の授業または学内プロジェクト）	1	2	3	4	5	6	7
3. 学内イベントの企画・運営等	1	2	3	4	5	6	7
4. 部活動・サークル	1	2	3	4	5	6	7
5. インターンシップ・実習	1	2	3	4	5	6	7
6. ボランティア学習（大学主催の地域貢献活動・社会活動）	1	2	3	4	5	6	7
7. アルバイト	1	2	3	4	5	6	7
8. 学生祭典（大学コンソーシアム京都の事業）	1	2	3	4	5	6	7
9. ボランティア・NPO活動（大学と関係のない自主的活動）	1	2	3	4	5	6	7
10. 友人や家族との交流	1	2	3	4	5	6	7
11. 家族との交流や世話	1	2	3	4	5	6	7
12. 趣味・習い事	1	2	3	4	5	6	7

問6　あなたのこれまでの生活についてお伺いします。あてはまる選択肢に一つだけ○をしてください。
①部長や委員長など集団のリーダー的ポジションになることが多かったですか　1. 多い　2. 少ない　3. まったくない
②幹部のポジション（副部長・書記など）になることが多かったですか　1. 多い　2. 少ない　3. まったくない
③友達グループの中心にいることが多かったですか　1. 多い　2. 少ない　3. まったくない
④ボランティアや地域での活動など社会とのつながりを持つ経験が多かったですか　1. 多い　2. 少ない　3. まったくない

問7　あなたは京都学生祭典実行委員会のことをどのようにして知りましたか。あてはまる選択肢をいくつでも○をしてください。
1. 雑誌、新聞を読んで　2. テレビを見て、ラジオを聞いて　3. コンソーシアム京都のインターネット・携帯サイトから　4. 教員に紹介されて
5. ボランティア情報誌、機関誌を読んで　6. 過去の京都学生祭典のイベントに参加して　7. キャンパスプラザ京都で情報を知って　8. 各大学の窓口で
9. 友人から聞いた　10. 家族・親戚に聞いた　11. 実行委員経験者に聞いた　12. その他（　　）

問8　あなたが京都学生祭典実行委員になろうと決めたのはどのような理由からですか。あてはまる選択肢をいくつでも○をしてください。
1. 祭典実行委員に誘われたから　2. 友人に誘われたから　3. コンソーシアム京都の職員に誘われたから　4. インターカレッジの活動に魅力を感じたから
5. 他大学の友人ができるから　6. 活動が楽しそうだったから　7. 何かの活動に参加したかったから　8. 自分を変えたい、磨きたかったから
9.その他（　　）

問9. あなたが京都学生祭典実行委員の活動を通じて、得たいこと、学びたいことについて、ご自由にご記入ください。

参考資料2-2

京都学生祭典実行委員の活動を通じた成長についてのアンケート【中間調査】

この調査は、京都学生祭典実行委員のみなさんが、委員の活動を通じて何を学び身に着けたのかを通じ、今後の京都学生祭典の活動をより発展させるために実施するものです。この調査は、回答は、すべて統計的に処理しますので、みなさんのプライバシーが知られる可能性はありません。また、調査結果は、論文や報告書の形で、公表することがありますが、その場合も、回答者個人を特定できない方法と形式で行います。ご協力いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

問い合わせ先
公益財団法人大学コンソーシアム京都
学生交流事業部　中本雅和
Tel:075-353-9189　Fax:075-353-9121
E-mail:gk-ml@consortium.or.jp

部署名：　　大学名：　　回生　　氏名：

※以下、各項目のあてはまる得点マスに○をつけ、その理由や根拠、コメントを必ず記入してください

第13回京都学生祭典評価シート			【調査日】 月　日	評価の理由・根拠・コメント（具体的にお書き下さい）
分類	項目	内容	中間評価	
個人	行動力	何をしたらいいか分からず、行動できない	1	
		周りからの指示があれば、行動できる	2	
		周りからの指示がなくても行動できるが、目標を意識していないことが多い	3	
		自分で判断して行動できるが、目標を達成できることが少ない	4	
		自分で判断して行動し、目標を達成することができる	5	
	責任感	自分の役割が分からず、役割を果たしていない	1	
		自分の役割を把握しているが、自分の役割を果たしていない	2	
		自分の役割を把握して、自分の役割を果たそうとチャレンジしているが、できていないことがある	3	
		自分の役割を把握して、自分の役割を果たしている	4	
		自分の役割の範囲だけでなく、全体を把握して、最後まで諦めずに自分の役割を果たしている	5	
	楽しむマインド	なぜやっているのか分からず、何もしていない	1	
		なぜやっているのか分からないまま、タスクとしてやっている	2	
		活動の目的を理解しているが、やりがいが見いだせない	3	
		活動の目的を理解して、日々の活動を楽しんでいる	4	
		活動の目的に共感し、やりがいを感じながら活動を楽しんでいる	5	
	京都LOVE（地域愛）	京都に興味関心がなく、京都のことを説明することができない	1	
		京都に興味関心はあるが、京都のことを説明することができない	2	
		京都に興味関心があり、京都のことを説明することができる	3	
		京都に高い興味関心があり、自ら京都の魅力を発見し、周囲に発信することができる	4	
		京都に高い興味関心があり、自ら京都の魅力を発見し、その魅力を元に新たな価値を生み出すことができる	5	
	前向き力	つらい状況になった時に、くよくよ考えてしまい、気持ちの切り替えができない	1	
		つらい状況になった時に、時々気持ちの切り替えができる	2	
		つらい状況になった時でも気持ちの切り替えができる	3	
		つらい状況になった時に、前向きに行動できる	4	
		どのような状況下でも、前向きに行動できる	5	
	論理的思考力	考えようとしない。または、一つ一つの情報すら理解できない	1	
		一つ一つの情報は理解できるが、それらの関係性は分からない。	2	
		一つ一つの情報を理解することができ、それらの関係性も理解できる。	3	
		関係性を理解した上で全体の中での位置づけをすることができる	4	
		情報を理解し、組み立てて活用することができる	5	
	見通し力	課題が分からず、目の前の個人の仕事に対して着手できない	1	
		目の前の個人の仕事に対して着手することができる	2	
		自分の部署の企画の流れを理解し、実行に移すことができる	3	
		学生祭典全体の流れを捉える事ができ、優先順位を付けて、実行に移すことができる	4	
		学生祭典全体の流れを捉える事ができ、優先順位を付けて実行に移すことができ、不測の事態を予想することができる	5	
他者への働きかけ	コミュニケーション力	相手を理解しようとしない。または、相手の話を理解できない	1	
		相手の話は理解できるが、自分の意見を相手に理解してもらうことができない	2	
		相手の話を理解し、また自分の意見を相手に理解してもらうことができる	3	
		背景を含め、お互いに理解を深めて、より有益な関連情報等を交換し合える	4	
		背景を含め、お互いに理解を深めて、より有益な関連情報等を交換した上で、更なる協力を得ることができる。	5	
	協力を得る力	誰にも相談せず、自分で抱え込んでしまう	1	
		誰にも相談せず、自分で抱え込み、自分一人で解決しようとする	2	
		解決に向けて、自ら周りの人から意見を聞くことができる	3	
		解決に向けて、自ら周りの人から意見を聞いて、協力を得ることができる	4	
		解決に向けて、周りの人が同じ目標に向かって行動してくれる	5	
	伝える力	言いたいことが分からない	1	
		言いたいことはあるが、うまくまとまらず、言葉にすることができない	2	
		言いたいことを言葉にすることができる	3	
		分かりやすく自分の言葉で説明することができる	4	
		分かりやすく自分の言葉で説明し、相手が理解してくれる	5	
他者への働きかけ	多様性の理解	チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場に関心がない	1	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場に関心はあるが、理解はできない	2	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場に関心があり、理解をしているが、それを踏まえて行動することができない	3	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場を理解して、行動することができる	4	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場を理解し、新たな価値を創造することができる	5	
	チームワーク力	人の意見を理解することができず、一緒に行動することができない	1	
		チームの一員として動くことができる	2	
		自分の役割を自覚して、チームの一員として動くことができる	3	
		チームメンバーとして動くことができ、チームメンバーの良さを引き出すことができる	4	
		チームメンバーの良さを引き出し、お互いの足りない部分を補う事ができる	5	

問1　今年度の京都学生祭典の委員を始めてから今まで、京都学生祭典の活動をどの程度がんばりましたか。
該当する番号に◯印を付けてください。

1. とてもがんばった

2. ややがんばった

3. どちらかといえばがんばった

4. どちらかといえばがんばらなかった

5. あまりがんばらなかった

6. まったくがんばらなかった

問2　今年度委員になってから今まで、「睡眠以外の活動時間」のどの程度を京都学生祭典の活動に費やしましたか。
「すべての時間を費やした」を100%、「まったく時間を費やしていない」を0%として、数字を回答してください。

【　　】%

参考資料2-3

京都学生祭典実行委員の活動を通じた成長についてのアンケート【事後調査】

この調査は、京都学生祭典実行委員のみなさんが、委員の活動を通じて何を学び身に着けたのかを通じ、今後の京都学生祭典の活動をより発展させるために実施するものです。この調査は、回答は、すべて統計的に処理しますので、みなさんのプライバシーが知られる可能性はありません。また、調査結果は、論文や報告書の形で、公表することがありますが、その場合も、回答者個人を特定できない方法と形式で行います。ご協力いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

問い合わせ先
公益財団法人大学コンソーシアム京都
学生交流事業部　中本雅和
Tel:075-353-9189　Fax:075-353-9121
E-mail:gk-ml@consortium.or.jp

部署名：　　大学名：　　回生　　氏名：

※以下、各項目のあてはまる得点マスに〇をつけ、その理由や根拠、コメントを必ず記入してください

第13回京都学生祭典評価シート			【調査日】 月　日	評価の理由・根拠・コメント （具体的にお書き下さい）
分類	項目	内容	事後評価	
個人	行動力	何をしたらいいか分からず、行動できない	1	
		周りからの指示があれば、行動できる	2	
		周りからの指示がなくても行動できるが、目標を意識していないことが多い	3	
		自分で判断して行動できるが、目標を達成できることが少ない	4	
		自分で判断して行動し、目標を達成することができる	5	
	責任感	自分の役割が分からず、役割を果たしていない	1	
		自分の役割を把握しているが、自分の役割を果たしていない	2	
		自分の役割を把握して、自分の役割を果たそうとチャレンジしているが、できていないことがある	3	
		自分の役割を把握して、自分の役割を果たしている	4	
		自分の役割の範囲だけでなく、全体を把握して、最後まで諦めずに自分の役割を果たしている	5	
	楽しむマインド	なぜやっているのか分からず、何もしていない	1	
		なぜやっているのか分からないまま、タスクとしてやっている	2	
		活動の目的を理解しているが、やりがいが見いだせない	3	
		活動の目的を理解して、日々の活動を楽しんでいる	4	
		活動の目的に共感し、やりがいを感じながら活動を楽しんでいる	5	
	京都LOVE（地域愛）	京都に興味関心がなく、京都のことを説明することができない	1	
		京都に興味関心はあるが、京都のことを説明することができない	2	
		京都に興味関心があり、京都のことを説明することができる	3	
		京都に高い興味関心があり、自ら京都の魅力を発見し、周囲に発信することができる	4	
		京都に高い興味関心があり、自ら京都の魅力を発見し、その魅力を元に新たな価値を生み出すことができる	5	
	前向き力	つらい状況になった時に、くよくよ考えてしまい、気持ちの切り替えができない	1	
		つらい状況になった時に、時々気持ちの切り替えができる	2	
		つらい状況になった時でも気持ちの切り替えができる	3	
		つらい状況になった時に、前向きに行動できる	4	
		どのような状況下でも、前向きに行動できる	5	
	論理的思考力	考えようとしない。または、一つ一つの情報すら理解できない	1	
		一つ一つの情報は理解できるが、それらの関係性は分からない。	2	
		一つ一つの情報を理解することができ、それらの関係性も理解できる。	3	
		関係性を理解した上で全体の中での位置づけをすることができる	4	
		情報を理解し、組み立てて活用することができる	5	
	見通し力	課題が分からず、目の前の個人の仕事に対して着手できない	1	
		目の前の個人の仕事に対して着手することができる	2	
		自分の部署の企画の流れを理解し、実行に移すことができる	3	
		学生祭典全体の流れを捉える事ができ、優先順位を付けて、実行に移すことができる	4	
		学生祭典全体の流れを捉える事ができ、優先順位を付けて実行に移すことができ、不測の事態を予想することができる	5	
他者への働きかけ	コミュニケーション力	相手を理解しようとしない。または、相手の話を理解できない	1	
		相手の話は理解できるが、自分の意見を相手に理解してもらうことができない	2	
		相手の話を理解し、また自分の意見を相手に理解してもらうことができる	3	
		背景を含め、お互いに理解を深めて、より有益な関連情報等を交換し合える	4	
		背景を含め、お互いに理解を深めて、より有益な関連情報等を交換した上で、更なる協力を得ることができる。	5	
	協力を得る力	誰にも相談せず、自分で抱え込んでしまう	1	
		誰にも相談せず、自分で抱え込み、自分一人で解決しようとする	2	
		解決に向けて、自ら周りの人から意見を聞くことができる	3	
		解決に向けて、自ら周りの人から意見を聞いて、協力を得ることができる	4	
		解決に向けて、周りの人が同じ目標に向かって行動してくれる	5	
	伝える力	言いたいことが分からない	1	
		言いたいことはあるが、うまくまとまらず、言葉にすることができない	2	
		言いたいことを言葉にすることができる	3	
		分かりやすく自分の言葉で説明することができる	4	
		分かりやすく自分の言葉で説明し、相手が理解してくれる	5	
他者への働きかけ	多様性の理解	チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場に関心がない	1	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場に関心はあるが、理解はできない	2	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場に関心があり、理解をしているが、それを踏まえて行動することができない	3	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場を理解して、行動することができる	4	
		チームメンバー・産学公地域・来場者などの考えや立場を理解し、新たな価値を創造することができる	5	
	チームワーク力	人の意見を理解することができず、一緒に行動することができない	1	
		チームの一員として動くことができる	2	
		自分の役割を自覚して、チームの一員として動くことができる	3	
		チームメンバーとして動くことができ、チームメンバーの良さを引き出すことができる	4	
		チームメンバーの良さを引き出し、お互いの足りない部分を補う事ができる	5	

問1　あなたの「性別」と「年齢/回生」を教えてください。
1. 女性　　2. 男性　　3. どちらとも言えない　　年齢(　　)歳／(　　)回生

問2　あなたの実行委員会の活動についてお伺いします。
①今年で何回目の実行委員になりますか。
1. 一回目　　2. 二回目　　3. 三回目

②担当部署は、次のどれにあたりますか。また、昨年以前にも活動をされていた場合、その活動についてもあてはまる数字をご記入ください。
1. 執行部(四役)　2. 企画運営部　3. 広報部　4. 営業部　5. 警備部　6. おどり普及部　7. 年間交流部　8. 総務部　9.未定

今回[_____]　　前回[_____]　　前々回[_____]

問3　あなたの高校までの生活で努力したものから順に、[____]内に1～3の番号をつけてください。
[_____]学校の勉強　　[_____]ボランティア活動　　[_____]部活動　　[_____]アルバイト・仕事
[_____]友人や恋人との交流　　[_____]塾　　[_____]家族との交流や世話　　[_____]趣味・習い事

問4　あなたの高校までの学業成績は、次のどれにあたりますか。あてはまる選択肢に一つだけ○をしてください。
1. 上　　2. 中の上　　3. 中　　4. 中の下　　5. 下

問5　あなたはこれまでの大学生活で次にあげる項目についてどの程度努力しましたか。あてはまる選択肢に一つだけ○をしてください。

	とても努力した				まったく努力しなかった		(経験しなかった)
1. 授業(講義・演習等)	1	2	3	4	5	6	7
2. 課題解決型学習(大学の授業または学内プロジェクト)	1	2	3	4	5	6	7
3. 学内イベントの企画・運営等	1	2	3	4	5	6	7
4. 部活動・サークル	1	2	3	4	5	6	7
5. インターンシップ・実習	1	2	3	4	5	6	7
6. ボランティア学習(大学主催の地域貢献活動・社会活動)	1	2	3	4	5	6	7
7. アルバイト	1	2	3	4	5	6	7
8. 学生祭典(大学コンソーシアム京都の事業)	1	2	3	4	5	6	7
9. ボランティア・NPO活動(大学と関係のない自主的活動)	1	2	3	4	5	6	7
10. 友人や家族との交流	1	2	3	4	5	6	7
11. 家族との交流や世話	1	2	3	4	5	6	7
12. 趣味・習い事	1	2	3	4	5	6	7

問6　あなたのこれまでの生活についてお伺いします。あてはまる選択肢に一つだけ○をしてください。
①部長や委員長など集団のリーダー的ポジションになることが多かったですか　1. 多い　2. 少ない　3. まったくない
②幹部のポジション(副部長・書記など)になることが多かったですか　1. 多い　2. 少ない　3. まったくない
③友達グループの中心にいることが多かったですか　1. 多い　2. 少ない　3. まったくない
④ボランティアや地域での活動など社会とのつながりを持つ経験が多かったですか　1. 多い　2. 少ない　3. まったくない

問7　あなたは京都学生祭典実行委員会のことをどのようにして知りましたか。あてはまる選択肢をいくつでも○をしてください。
1. 雑誌、新聞を読んで　2. テレビを見て、ラジオを聞いて　3. コンソーシアム京都のインターネット・携帯サイトから　4. 教員に紹介されて
5. ボランティア情報誌、機関誌を読んで　6. 過去の京都学生祭典のイベントに参加して　7. キャンパスプラザ京都で情報を知って　8. 各大学の窓口で
9. 友人から聞いた　10. 家族・親戚に聞いた　11. 実行委員経験者に聞いた　12. その他(　　)

問8　あなたが京都学生祭典実行委員になろうと決めたのはどのような理由からですか。あてはまる選択肢をいくつでも○をしてください。
1. 祭典実行委員に誘われたから　2. 友人に誘われたから　3. コンソーシアム京都の職員に誘われたから　4. インターカレッジの活動に魅力を感じたから
5. 他大学の友人ができるから　6. 活動が楽しそうだったから　7. 何かの活動に参加したかったから　8. 自分を変えたい、磨きたかったから
9.その他(　　)

問9. 当初、あなたが京都学生祭典実行委員の活動を通じて、得たかったこと、学びたかったことは何ですか。ご自由にご記入ください。

問10　今年度の京都学生祭典の委員を始めてから今まで、京都学生祭典の活動をどの程度がんばりましたか。
1.とてもがんばった
2.ややがんばった
3.どちらかといえばがんばった
4.どちらかといえばがんばらなかった
5.あまりがんばらなかった
6.まったくがんばらなかった

問11　今年度委員になってから今まで、「睡眠以外の活動時間」のどの程度を京都学生祭典の活動に費やしましたか。
「すべての時間を費やした」を100%、「まったく時間を費やしていない」を0%として、数字を回答してください。
(　　)%

問12　.次年度も委員を引き続きやりたいと思いますか、思いませんか。
1.非常にやりたい
2.ややりたい
3.どちらかといえばやりたい
4.どちらかといえばやりたくない
5.あまりやりたくない
6.まったくやりたくない